

2024 年度

下半期報告書



2024 年度冬合宿(大天井岳)

信州大学山岳会

目次

《プレ冬合宿》・・・p.4~

浅間 浅間山第1外輪山

《冬合宿》・・・p.13~

北ア 朝蝶ヶ岳

《個人山行》・・・p.21~

11月

10月

八ヶ岳 大同心南稜～小同心クラック

中ア 朝木曾駒ヶ岳

南ア 白根南嶺

頸城 海谷山塊縦走

北ア 有明山 表参道ルート

北ア 笠双六（クリヤ谷）

小川山 烏帽子岩左稜線

戸隠 戸隠～西岳縦走

妙義 妙義山

北ア 鹿島槍ヶ岳

12月

八ヶ岳 八ヶ岳全山ワンデイ

北ア 爺ヶ岳東尾根

北ア 唐松岳

1月

北ア 常念岳 避難小屋泊

信越 天水山

八ヶ岳 八ヶ岳半山

奥志賀 苗場山

北ア 餓鬼岳、唐松岳

奥志賀 志賀高原縦走

頸城 黒姫山

頸城 佐渡山BC

南佐久 南佐久バリエーション

信越 鍋倉山BC

2月

中ア 空木岳池山尾根

八ヶ岳 峰の松目沢・小同心クラック

北ア 鹿島槍ヶ岳赤岩尾根

北ア 北葛岳北葛尾根

北ア 槍ヶ岳中崎尾根

八ヶ岳 旭東稜

3月

南ア 白根三山

奥秩父 一年縦走

北ア 常念岳東尾根

北ア 唐松岳八方尾根

八ヶ岳 南沢大滝

《事故報告書》・・・p.49~

・前穂高岳北尾根事故報告書



栗田耕一(会1)

プレ冬合宿

日程：12/7（土）～12/9（月）

メンバー：

会3 椎屋(L)

会2 金子、木村、田中

会1 江田、栗田、武田、中田、橋本

OB 竹田さん

記録・所感：

1日目 雪

9:10 アルプス平駅

10:05 地蔵の頭

13:40 1892m

15:05 天場（1950m付近）

積雪に恵まれてスキー場からは腰～胸高のラッセルになった。初めてのラッセルに大苦戦しつつ小遠見山手前の 1950m 付近を天場とした。

2日目 雪

4:00 起床

5:05 発

5:25 雪訓開始

15:45 雪訓終了

16:25 天場

雪訓は天場から少し下った 1900m 付近で行った。積雪量は十分であり、訓練場所に困ることはなかった。

3日目 晴

5:30 起床

6:50 発

7:15 1892mP

9:25 地蔵の頭（雪訓開始）

12:15 地蔵の頭（雪訓終了）

12:45 アルプス平駅

降雪により下山に要する時間の予測が難しかったため、地蔵の頭まで下ってから雪訓を行った。こちらはやや積雪量が少なくなるものの、雪訓を行うことができた。



反省：

会1

栗田

まず行動の反省です。雪上歩行で、特に2番手に歩く際にトレースがうまく踏めない部分が多くありました。前の人と離されないことで実際に踏んでいる部分も目視することが大切だと感じました。加えて、返事の声が聞こえていないことや、声が小さい場面がありました。冬期は夏期と比べて聞き取りにくいことや、届かないことも考えて意識して大きな声で喋ることと、常に広い視野を持てるよう、一つのことに集中しうぎないようにします。

生活では、朝の生活を効率よく行なうことが課題です。個装にかける時間を上手く配分しようと考えています。また、雪袋などやっていない冬の仕事があるので、次週までに会一同士で共有したいと思います。

最後に雪訓です。シュミレーションの際

に、プローピングで笹を人と間違えてしまったことは、今後しないようにします。今回で、笹の感触は確実に覚えているので、以後間違えないようにし、クロスサーチ判定前のゾンデはあくまでも補助ということを忘れないようにします。また、危急時と同じく焦ってしまった部分があったので、自分の役割りとすべきことに、注力することを意識します。

プレ冬合宿を通して、雪崩の危険性と、わずかな対策を学ぶことが出来ました。私たちのために3日間の時間を割いて教えて頂き、ありがとうございました。

江田

・訓練 最大の反省はスコップを雪上に刺さないということが最後までできなかつたこと。スコップを刺さなくともいいような環境だったことが一番の原因であるとは思うが身に着けていないものを雪面に刺すという癖が身についていることが最大の問題であると思う。次にゾンデを刺す角度をこだわらなかつたこと。これにより斜面でプローピングをした際に、かなり誤差が出てしまつた。また、この誤差により木に誤ヒットしてしまつた。最初の一本はもっとシビアに刺すべきであった。

・生活 最大の反省は吹雪いているときに、素手でテントから出てしまつたこと。手の感覚がやばくなってきたのでオーバー手をしたので少しむくんだ程度で済んだが、凍傷は急に進行するということを考えると危なかった。しかしこのことは良い反面教師になった。次にテント内で“濡れ”にこだわらなかつたこと。結果手袋を湿らしたままにして次に使つた際に寒くなつた。今回の

生活で乾いていることの気持ちよさを知つたので、もっと気にしていきたい。

・行動 最大の反省はラッセルで大いにズボッたこと。初めてのラッセルで慣れていなかつたこともあるあまりに沈みすぎてスピードも遅く、疲れてしまつた。経験しないと上手くならないものであると思うので今後上手くなつていきたい。次に装備の防水にこだわらなかつたこと。オーバー手をしたまま規格袋の口を引き解け結びをするのが億劫になつてしまつしなかつた。結果、ヘッドランプを無くしかけた。オーバー手をしたままで全てをできるように練習するしかない。

武田

生活

冬の生活では気遣いが大切であることを学んだ。狭いテントの中でどのようにスペースを共有するかについては周りの人間にものを取つてもらうなど夏以上に工夫する必要があると感じた。そして夏以上に水をこぼさないことを意識しなければならないと思った。夏に比べて気温が低いため濡れることに過敏にならなければならぬと感じた。ほかにも火器に対する注意がもっと必要であると感じた。ヤッケが溶けてしまつたりしてしまうとその後の山行に影響が出てしまうため気を付ける必要がある。そして冬の火器は水を作つたり、ご飯を作つたりなどとても重要な装備であるため火器を夏より重要な装備であると感じた。今回の合宿で新しいことをたくさん学んだので今後の山行を通してより効率的により安全に行えるように改善していきたい。

雪訓

死んではならないと改めて強く感じた。人の命は自分が想像していた以上に重く助けるのはとても難しいものであると感じた。死なない確率が 0.1%でも上がるのであればそれを怠ってはならないという竹田さんの言葉は今後の山行全体を通して忘れないようにしていきたい。自分のショベリング能力を向上させる必要があると感じた。シャベリングのスピードも必要だがそれ以上に今の max スピードを長時間維持させることができると感じる体力が必要だと感じた。体力がないと交代のときのスピードも落ちてしまう上にリーダーなどのコールを聞き取ることができなくなってしまう。またゾンデを指してもらう時の指示も甘かったと感じる。クロスサーチを終えた後しっかりとゾンデを自分で持ち実際に角度を指定しなければならないと感じた。さらにリーダーを行っていた時ヒットした後のゾンデを抜いてしまった。これはせっかく見つけた場所を失ってしまうので絶対あってはならない。ヒットした後すぐに不必要的ゾンデは抜いておく必要があった。そしてクロスサーチの精度、速度も上げる必要があると思う。精度を上げるためにゆっくりやりすぎると時間がかかりすぎるし、速度を上げるために早くやりすぎると見つからなくなってしまうのでちょうどいいバランスを見つけていく必要があると思う。

行動

ゴーグルを裸で入れてしまっていた時があった。割れてしまうと使い物にならなくなってしまって凍傷のリスクなどが出てきてしまうので今後はないようにしなければならない。ほかにも雪面に直接ものを置いてしまった時もあった。山では失ってはい

けないものばかりなのでそのような細かいところを怠らないようにしていきたい。また冬になり手袋をつけていることにより夏に比べて一本中にできることが少なくなってしまった。レーションの持つていき方を工夫するなど一本中にやらなければならぬことをできるようにしていきたい。今回の山行は雪の量が多くラッセルが大変であった。自分の体力不足向上が必要だと感じた。

今回の合宿でお世話になった竹田さん、新谷さん、上級生の皆様ありがとうございました。

中田

私は、プレ冬を終えて、冬山への怖さを感じたと同時に、自分の実力不足を強く感じた。行動とエッセン、雪訓に分けて反省をここに記す。

まず初めに、行動面では体力不足を強く感じた。ラッセルにおいて、深い雪をしっかりと踏み固めることができずに苦戦しました。身体も固く、足を横に回す動作がもっと綺麗にできたらうまくラッセルできるのではないかと思いました。また、装備の着脱などのスピードが遅く、周りに迷惑をかけてしまいました。オーバー手をした状態での操作が遅く、バフを付けるときに上からメットを被る動作が、バックルが凍っていましたのもありませんでした。1つ1つのスピードが凍傷などのリスクに直結する冬山において致命的だったため、バックルをあらかじめ長く伸ばしておいたり、チャックにリーシュをつけて動かしやすくなりして、早くできるよう工夫したいです。

次にエッセンについてです。「冬ゼミで濡れに敏感になれ」と言っていたにも関わらず、多くのものを濡らしてしまいました。特に、出入りするときに背中の雪を落とすことができておらず、テントの外側にいた金子さんに迷惑をかけてしまいました。他にも紅茶を沸かすときに1回で終わらせたくて、鍋の中に紅茶を入れすぎてこぼしてしまいました。冬の装備は乾くことが基本的になく、濡れは凍傷などにつながる危険性があるので、おおちゃくをせずに丁寧に行動したいです。他にも、周りに対する気遣いが足りなかったと思います。自分でもできる仕事が多かったにも関わらず、他の会1に任せてしまう場面が多くありました。積極的に自分から仕事を行なうことが、他の人の行動をスムーズにすることにも繋がるので、自分でできることを考えながら効率的に行なうようになりました。

最後に、雪訓についてです。私は、ショベリングが他の誰よりも遅く、周りに劣っていました。実際に埋没してみて、埋められたら1分1秒を争うことを実感したにも関わらず、掘り始めると焦って周りが見えなくなってしまい、非効率的な掘り方になってしまいました。鬼気迫る状況こそ落ち着いて行動できるよう、客観的なイメージを大切にして自分の限界を決めずに、1%でも仲間を助けられる確率を上げられるようにしたいです。また、クロスサーチにおいては、補助の人の大切さを実感しました。クロスサーチの精度を上げていくために、クロスサーチをする人が少しでもやりやすいように十字を正確に書き、高さの変化を見ていく完璧な補助を身につけたいです。

橋本 生活

今回が初めての冬の生活を実践する場であるがあまりにも火器の扱いが雑であった。冬の生活では水作りや暖を取る、食事をとるなど火器は非常に重要な役割を果たし、火器がなければ山行は成り立たない。しかしながら自分は空のコッフェルを片手でもち、手を滑らせて落としてしまい火器にぶつけてしまった。火器は幸いにも倒れることはなかったがこのような行動は死に直接つながりかねないので今後絶対にないようにする。さらに、火器の上で物の受け渡しが多すぎる、コッフェルの水滴を取る作業を火器の真上で行い、ヤッケが燃えそうになることも多々あった。また、火器の周辺に燃えやすいような規格袋やテントシューズなどを置きすぎていた。今後このようなことが再発してしまわないよう火器の扱いには十分注意することを徹底するようとする。自分はトイレに行くことが非常に多く、エッセンに遅れが生じたためションポリの導入を眞面目に検討する。

雪訓

雪訓時は焦ってしまいその場に適した行動ができていなかった。今回クロスサーチを担当することが多かったが早く救出したいという焦りから正確性を求める作業をゆっくりと丁寧に行なうことができていなかった。クロスサーチを正確に行なうことは救助のスピードに大きく関わるということを肝に銘じておくようとする。また、自分は周りが見えなくなることが多々あった。ショベリングやクロスサーチでは自分がその時していることに夢中になってしまい周りの状況を理解したり、他の人の声に耳を傾ける

ことができていなかった。より周りに意識を向け、特にリーダーの指示は非常に重要なため、作業している最中もリーダーの指示をいつでも受容できるよう常に心掛ける。

行動

出発時にビーコンの電池を入れ忘れ、さらに残量を確認したものと違う電池を入れてしまったために隊の行動が遅れたことは大きな反省である。準備の不備は今後ないようにする。温度調整などで防寒着や手袋などをガッシャーに入れる際のジップロックの締めや規格袋の結びが緩く、開いていたため防水の意味を成していなかった。めんどくさがらずに防水はしっかりとするように気をつける。ラッセルが下手であることやトレースを崩してしまうことが多かったことに関しては教わったことを意識して経験を積み上達していきたい。



会2

金子

今年もプレ冬合宿を無事終えることができ、下山から3日目の現在、下界の温かい環境の中、心底安心している。同期や先輩に本当に助けられ、何とか形を保っていた自分にとって、今までの小ぶりな経験の中で

は屈指のつらい山行だった。以下に本合宿を雪上訓練・行動・生活・係の4つに分けて振り返る。なお、ここでは自分個人の反省にとどめ、会全体としての課題の議論については割愛する。

1. 雪上訓練

今回の合宿のメインをなす雪上訓練について、自分の果たした仕事量は山行を行った他の上級生の中で最低だったといえるだろう。

特に、合宿前の在松の上級生による一年生の指導では、内容の計画とその全体への共有、現場での進行などの業務の多くを木村に負担させてしまった。今回に限らず松本支部の運営において、主体的な参加はせず積極的にサボタージュしてきた。こういった態度は即刻改める。

また雪上訓練の現場では田中に負担が集中していた一方、自分は持ち前の計画性と観察力の欠如を十分に発揮して、指導内容の計画と適地の選定について適宜行われた上級生間での話し合いでなかなか有用な意見を言えなかった。加えて自分の技能不足とそこに起因する自信のなさを理由として、他の上級生の指導に対する違和感や疑問を感じたにも関わらず、その場を流すことであった。

一年生の指導以前に自分の知識・技術もひどかった。クロスサーチの精度は完璧とは言えず、シャベリングに対応するだけの体力と周囲の観察力もまだまだ。雪崩搜索におけるリーダー等の役割についての理解も不足していた。

2. 行動

プレ冬合宿には冬山でいかにリスク回避に努めるか一年生に教えるという重要な目

的があるが、これを果たそうとする意識があ
行動面では足りなかった。一年生に伝え残
したことは数多く、特に赤旗の使用法など
は実際の使用に最適な条件がそろっていた
のに、怠慢によりこれに気づかなかつた。

またここでも見通しのなさが露呈した。
テン場や雪上訓練の適地を探しつつ歩くと
いったことや、時間や各人の疲労などとの
兼ね合いを考えて適切な人員配置をすると
いった対応が後手に、しかも他の上級生や
OB に言われてやっと気づくことが少なか
らずあった。

3. 生活

ここでは、一年生に対する指示が後手に
回っていたことと、冬特有の生活の説明が
不親切でいまいち根本的な部分についてい
なかつたことが反省だ。

冬の生活では水をこぼさない・装備を濡ら
さないことがとても重要であるが、何度も
水の入った容器が横倒れになりそうな場面
ができる肝を冷やした。また装備の紛失も
しょっちゅう起こった。火器の扱いも安心
できるものとは言い難かった。これらすべ
て、自分の指示が当時の状況に後れを取つ
たことが理由である。一年生にはさんざん
次にすべきことを考えるよう言っていたが、
本当にそれが求められたのは自分の方であ
った。

先を見越した指示に加えて、その理由やこ
ちらの意図も伝えなければならない。なぜ
なら特に新しいことを覚える際には、仕組
みを知らないと習得に時間がかかり非効率
的だからである。それにも関わらず、疲労や
寒さなどで自分に余裕がなかったり、まあ
考えればわかるでしょと職務放棄を働いた
りして説明を省いたことがあった。

4. 係

最大の反省は、入山までにメンバーの変
更があったにも関わらず、それぞれの係の
引継ぎがされず、入山したメンバー同士で
すらお互いの役職を把握していなかつたこ
とにあつ。どうしてこれに気づかなかつた
のか不思議でならないが、自分が本合宿、ひ
いては会を運営するという主体的な意識が
足りていなかつたと思う。このような体た
らくだつたため、自分はエッセン係として、
エッセン計画にメンバー変更を反映するこ
とは当然なかつた。

こうした食料・装備の変更の必要性に直
前になって気づき、計画し直したのはここ
でもやはり木村であり、部室へのアクセス
が容易な在松の自分はもっと働くべきだつ
た。

木村

今回のプレ冬合宿は現役主体で運営し、
OB の竹田さんにはあくまで監督役として
ご同行いただくに限ることを目標としてい
たが、現役の実力が及ばず、多大なご協力を
賜る形となってしまった。その大きな原因と
して、事前の上級生の話し合いが不十分
であったこと、上級生自身が雪崩搜索の技
術に自信を持てていなかつたこと、そして
竹田さんに指摘していただいた、信頼から
ではなくから怠慢から他の上級生に人任せ
になつてしまふ場面があつたこと、以上 3
点が大きくあつたように感じる。

予め上級生で雪訓の時間配分や内容、担当
などを決めていたが、具体的に何を意図し
たものか、どのような場所で行うかまでを
詰めた話し合いをしていなかつた。例え
ば、技術向上を図るものか、単に確認するだけ

のものか、絶対に埋没者を助けるという強い気持ちを要するものか、上級生間で曖昧なために場を締められなかつた。また、多量の新雪のために雪訓場所を整地する想定もしていなかつた。個人的にも現役主体で進行しよう、判断を早くしようとするあまり出しゃばりすぎて、かえって隊を混乱させた節が多々あつた。次に自身の技量や知識に自信が持てず、それが暗に一年生にも伝わってしまったように思える。知識面において事前に確認できることを潰してプレ冬に臨んだつもりだったが、昨年のプレ冬以来実践をしておらず、自信を持つことができなかつたし、これは他の上級生も同様でのはずである。事前の話し合いでは、そのことを踏まえてもっと丁寧に行い、説明する内容についても担当者個人に任せるのではなく、要点を全員で確認するべきであった。さらに、今回は3日目に時間が余ったため、上級生も交えたクロスサーチを実施したがいい機会だった。来年もクロスサーチに関して上級生と一年生が一緒に行うことは検討したい。

今年度からは一年生よりも上級生の人数が多いために昨年とは違う課題も出た。上級生が集まって話し合いをすると、多くの意見が出る一方、隊の判断に時間を要し、意思決定をする者が曖昧になつてしまふ感じた。また、竹田さんからは仲間を信用することとただの怠慢を勘違いしないようにと指摘していただいた。自分が気づいた違和感や考えを、他の上級生がこうだからなどと決めつけ、それをそのまま流してしまわないようにする必要がある。

松本支部長として、一年生のビーコンサーチや装備チェックを中心的に担つた。落

ち葉を利用したクロスサーチや、ワカンアイゼンの着脱練習など、今年は多少工夫を凝らした成果があつたように感じる。ただ、今回の合宿を通して、プレ冬合宿をもっと実践の場として利用すべきだと実感した。先にも書いたがクロスサーチでもショベリングでも、上級生は説明のための簡易的な実演をしたのに限り、これでは一年生への手本にはなつていなかつた。上級生側もプレ冬を一年生への指導を大きな主体しながらも、山岳会として一年に一回の貴重な技術確認の場とするのが理想だと感じた。そのため、来年度は雪がなくてもできるこことは下で済ませ、プレ冬合宿を山岳会全体にとって利益となるような運営をしたい。

田中

反省を行動、生活、雪訓、係の4項に分けて記す。

まず行動について。行動中の上級生同士の相談が少ない、また相談を始めると長いという問題点があつた。各々が明確な意見やそれに対する自信を持てていないために、このような事態になつてしまつた。自身の意見を持つこと、意見に自信を持てるだけの経験を積むことが、重要になる。また行動における会1への声掛けも不十分であった。初めての雪山である会1にとって、今回の深雪の中の行動はかなりハードであったに違ひない。適切なフォローが必要であった。

次に生活について。もともと自覚していることだが、私は生活に指導が苦手である。テントは休む場所である。しかし効率的に休むためには、生活を手際よく進むことが肝要である。会1もしくは自身を甘やかさず、テント生活を大切にしていきたい。

次に雪訓について。計画段階から、上級生間で情報の共有が不十分であったように思う。特に細かい指導方法などの想定に違いがあり、そのために訓練が滞ることがあった。細部まで詰めておくこと、雪訓を詳細に想定することに努めたい。また前日に私が雪訓箇所の偵察に行ったのだが、雪訓当日にルーフアイミスをしてしまった。指導する側である上級生として考えられない失態である。

最後に係について。今回の合宿で私は雪訓係を担当した。雪訓の反省の項で述べた通り、雪訓は計画段階から不十分であった。これは偏に私の計画の粗雑さに起因するものである。詳細まで想定しつつ、想定外が起きた場合に備えてマージンを盛り込んでおくことも重要である。プレ冬合宿の雪訓ではかなり危険性の高いことを行っているよう思う。私のごく個人的な意見としては、危険の伴う訓練を通して冬山に対して恐怖を覚える経験は有用であると思う。しかし、訓練にまで危険を持ち込む必要がないという意見も妥当である。どれだけリスクを許容するかという議題に行きつくが、毎年入山前に検討しておく必要があると思われる。

会3 椎屋

プレ冬合宿についてまず行動面から述べる。開催を1週間遅らせた事もあり、今年はスキー場を出るや否や腰より深いラッセルとなった。その影響で当初目論んでいた地点までたどり着くかどうかが怪しいとなった時、はっきりと決断する事ができなかった。それによりペースも大して上がらず、

予定地よりも手前にあったテンバ適地を逃すという事態となった。この決断力の無さがシビアな山行では命取りとなる。進まない事は悪い事ではない。適宜適切な判断を取れるようにしたい。また自身が早くから日焼け対策を行っていたため、体感と実際の日射量にズレがあり、サングラス等装着の指示が遅れてしまった。もう少し客観的に物事を見られるようにならなければならぬ。さらに読図や赤旗設置についての説明をできなかった事も挙げられる。冬山最初の山行で伝えられる事はなるべく多く伝えておくべき所でこの失敗は大きい。やる事を頭に叩き込み、常時思い出せる状態にしておかなければならない。次に生活面だが、あまりのテントの不快さ故に少々気が立ってしまった。悪態をつく程度で済みはしたもの、周囲に良い影響を及ぼさない事に変わりはない。今更性格が直せるとは思っていないので、次回以降感情を押し殺す事で対処する。大きな失敗として、会1が手袋をつけずに外に出たのを見ていなかつた事が挙げられる。装備があまりにも散らかっており、そちらに気を取られてしまった。周りを見る目を養いたい。また、乾かす事を諦めてしまった事も反省である。いずれにせよ乾くことは無かっただろうが、それでも乾かすという意思を周囲へ示すべきだったよう思う。下級生への示しとして、無駄な事もやる意思が必要である。次に雪上訓練だが、こちらも全体の管理が甘かった。さらには間違いの指摘もまともに行えなかつた。何か意図があるもの、そもそも自分が間違っているのかもしれないなどと余分な考えを巡らせすぎていたのが原因である。何にせよ違和感があればそれを伝える

べきであった。コミュニケーションの下手さ加減はどうにかしなければならない。また雪上訓練開始前の話ではあるが、ルーフアイミスをしてしまった。事前に具体的な場所を聞いていなかった事、道のりについて疑問を投げかけなかった事が原因である。自分で下見に行っていないからこそ詳細に情報を得るべきであった。他人任せも甚だしい。さらに、先回りしての場所の整備も満足に行えなかつた。全体を見るという役目があるにしろ、もう少し次につながる行動をとるべきであった。最後に係としての反省である。今回はリーダーを担つたのだが、残念ながら夏合宿から変わっていないとお言葉を賜つた。未だリーダーとしての立ち回りを理解できず、どっちつかずの行動をとり続けた末路である。恐らく出しゃばるくらいの気持ちでいなければ現状は変わらないのだろう。リーダーを中心に隊が動くという事を再認識し、自身の立ち位置の重要さを理解しなければならない。確実な遂行のためにも色々と情報を集め吸収し、早急なレベルアップを目指す。リーダーの器ではないなどという弱気は排除しなければならない。以上の反省を活かした冬合宿となるようにしたい。



冬合宿 横通岳東尾根

日程：12/28（土）～1/2（木）

メンバー：

会3 椎屋(L)

会2 金子、木村、小嶋、田中、日比、
森

会1 江田、栗田、武田、中田、橋本

記録・所感：

1日目 雪

7:35 入山 1070m 地点

9:10 1324mP

11:30 朝川山

11:50 取り付き

13:55 1972mP

14:30 テン場 1950m 付近

膝下ほどの微妙な積雪に、変化の乏しい尾根。林道をショートカットしつつ登ったものの、永遠にも思えるほど長かった。取り付きからは急登。ピンテを巻き巻きしながら登る。

2日目 雪

5:00 起床

6:25 発

8:05 2103mP

8:35 2150mP

13:50 2467mP

14:00 テン場 2467mP 先のコル

目標は横通岳先のコルと意気込んでいた前夜リーダー会であったが、一筋縄でいかないのが冬合宿か。一ヵ所を除いて悪場はないものの、ヤブったりズボったり。とにかく進まなかった。尾根上に岩やら木の

根やらが出ている悪場は、南に少し巻けばロープを出す必要はなかった。

3日目 晴のち曇

4:00 起床

7:00 2493mP

8:25 横通岳

9:05 2727mP

10:20 東天井岳

11:05 2832mP

11:45～12:05 大天莊

12:15～30 大天井岳

12:40 大天莊

あまり思い通りにいかなかった前日、荒天予報の明日。不安要素が多い中で迎えた3日目であったが、かなり順調に進むことができた。ヤブが消えたのが主因だとは思うが、追い込まれた状況で頑張れたのは素晴らしい。稜線上は多くで雪が飛ばされており歩きやすい。東天井岳は巻かずに、夏道から少し逸れて登った。大天井から見た槍は一際黒く、美しかった。

4日目 吹雪

5:00 起床

大晦日沈殿。快適な避難小屋ライフを満喫した。お楽しみを大放出する者、映画鑑賞に耽る者、早めの寝正月を謳歌する者、各人が思い思いにモラトリアムを浪費していく様は、何故か見慣れた光景のような気がする。

5日目 晴風強し

5:00 起床

6:10 発

6:35 2832mP

7:15 東天井岳
7:55～8:35 江田アイゼン停滯
8:45 2727mP
9:10 横通岳
10:10 2493mP
11:15～12:00 テン場
12:10 2467mP
14:10 2150mP
14:25 テン場 2103mP
元日。初日の出に照らされる槍穂高も我々もカッコよかったと思う。多分。稜線から外れると昨日の吹雪による積雪があつたものの、下りには困らない程度である。登りで頑張ってピンテ巻き巻きしたおかげで、苦労することない快調な下りであった。例の悪場は、下りでも同じルートであればクライムダウンで問題なかった。

6日目 晴

5:00 起床
6:10 発
7:40 1972mP
8:40 取り付き
9:00 浅川山
9:45 1324mP
10:35 下山 1070m 地点

最終日。下山がほぼ確定している状況だったので、会1中心にルーファイをしながら下った。知らぬ間に正月気分に浮かれてしまった下界がやってくると、毎度のことながら魔訶不思議な感覚である。



反省：

会1

江田

・行動

最大の反省は大天荘冬季小屋からの帰りの道で分岐を間違えたことだ。後ろの人が気付いたから良かったものの、あれだけ視界がよかつた状態で間違えたということはまず意識が低いということだ。そして冬の読図は難しく、私には読図の力がないということだ。次にアイゼン行動の際にヤッケを破りまくったことだ。疲れてくると次第に足幅が狭くなったり、アイゼンのことを気遣えなくなったりして足とぶつけることがあった。これはたくさん経験を積んで慣れるしかない。

・生活

テントの整地を妥協したこと、テントシートの表裏を間違えたことが反省。その他にも細かい反省はあるが全てテント内での快適性につながるものだ。そしてそれらは回復や、ストレスを減らすことにつながる。これはとても重要な事であるので、今後はもっとこだわっていきたい。

栗田

まず初めに、生活の反省点です。今回の山行では、装備管理の面でヤッケの下を 1cm

切ってしまったことを失念し、事前の修理が不十分でした。また、時間管理においても、朝の個装準備や生活全般で時間配分が適切でなく、効率性に欠ける場面がありました。さらに、防寒対策ではバラクラバなどの顔の防寒具の準備が不足していたため、次回以降は天候に応じた適切な装備を準備します。加えて、道具の管理でも男装の位置把握や赤旗の雑な扱いが目立ち、今後は各装備の位置を明確にし、丁寧に取り扱うよう心掛けます。さらに、天気図の確認時には単にデータとして見るだけで状況の変化を十分に理解できていなかったため、風や日射などの情報をルーファイに活かせるよう、天候判断力の向上に努めます。ここからは、行動の反省点です。歩行技術に関しては、特に2番手として歩行する際にトレースを正確に踏めていない場面が多く、前の人との差を詰め、踏むべき場所を目視する重要性を再認識しました。また、蹴り込みの力が弱く角度が浅いため不安定な歩行となる場面があり、今後は角度をより深く意識して確実に蹴り込むことを徹底します。アイゼン装着時にも紐が緩んで装着が甘くなる場面があり、前日に使用した際の雪を十分に除去できていなかったため、次回からは使用後の雪の除去を徹底し、ワカンについても同様の注意を払います。加えて、地形の変化に応じたピッケルの持ち替えが不十分で、新人合宿で習得した技術でありながら徹底できていなかったことから、今後は小さな地形の変化にも対応できるよう徹底して意識します。さらに、読図の精度が低く、特定の箇所だけを見て全体の地形把握が不十分だったため、今後はより広範囲の地形情報を意識し、地図を見ていない間も現在位置

を把握できるよう努めます。また、冬期山行では声が届きにくく、返事が聞こえない場面がありましたが、次回からはより意識して大きな声で返事をし、常に広い視野で周囲を確認しながら行動します。トラバース中にはトレースを崩して転倒する場面もありましたが、蹴り込みができない状況であったため、今後は斜面の端を歩くなどの工夫をしてリスクを回避します。最後に、鍋分けの際にエッセンをこぼしてしまうなど、一つのことに集中しすぎて他の作業がおろそかになる場面も見られました。今後は周囲をより意識し、慎重に行動していきます。

武田

生活

まず準備段階でのミスがあった。ペミに人数のみを記述し何日日のものなのかを記入していなかった。準備は登山におけるもっとも重要な要素の一つであるため今後はないようにしなければならない。原因としては他の人が手伝ってくれた時に人数のみが記述されていてそれと全く同じように書いてしまった。何かと効率的なものを優先してしまい丁寧さに欠けているので改善していきたい。そして生活の細かいところまでの流れを把握しきれていないことがあった。今後の生活の流れを頭の中で考えるときに鍋の移し替えなど細かいところまで考えることができていなかった。数を重ねることでそのようなところは改善されると考えられるが、慣れるまではしっかり細かいところまで考えて行っていきたい。水作りの際鍋の底を拭く回数が少なかった。合宿全体を通して改善していったつもりではあるが今後の山行も気を付けていきたい。

ほかにもテントの中での物の管理は課題が残っている。大スタッフバッグの上に入れている個人装備を2つの袋にまとめて運用していく方法を上級生に教えてもらったので自分もその方法を取り入れていきたい。火器の分解ができるようになっておく必要があると指摘をもらった。第一回総会で軽く教えてもらった以降使うことがなかったため頭から抜けていると思うので、できるようになっておかなければならない。

行動

行動も準備段階でのミスがあった。前回の反省から地形図上の自分が登るラインに線を引いておいたのだが、尾根の分岐などルーファイの際に注意しなければならないところに印をつけていなかった。具体的にどのように注意しなければならないのかなどを知ったうえで印をつけるようにしたい。さらにアイゼンが外れるということが2回もあった。バイルの位置を変えることによって取れなくすることが可能であったため準備段階で気づくべきだった。準備は登山におけるもっとも重要な要素の一つであるため今後はないようにしなければならない。そして読図にも課題が残っている。歩いている途中に地図を見れる余裕があるときはまだまではあるのだが、その余裕がないときに読図ができていないことが多い。読図は点と点ではなく線で考えていかなければならぬため、細かく地図を見ていかなければならぬのだが、それができていないうきが多かった。まずその余裕を作れるための体力と歩行技術が必要であった。さらに先の地形がどのようになっているかをしっかりと把握しておく必要があった。そして歩行技術にも問題があった。木の位置な

どを気にしてずぼらないうな工夫が必要だった。これも経験を通して改善していかなければいけない。さらに日射の方向や風の方向などまでも気にしていきながら細かいルーファイをしていかなければならぬ。ほかにも、天気をもっと重要視していかなければならない。下界での天気予報を見ておくのはもちろん天気図も丁寧さに欠けていた。山では天気がかなり大きな要素になってくるのでちゃんと把握しなければならない。素手になって外に出ることが2回ほどあった。寒さに対する警戒心が薄いので改善していきたい。

指導してくださった上級生、OBの皆様ありがとうございました。

中田

まずは、冬合宿を終えて、大天井岳の山頂の上で春寂寥を歌ったことが一番印象に残っています。今回の合宿を通して多くの課題が見つかったので、行動とエッセンに分けてここに記します。

はじめは行動についてです。一番大きな反省は雪上歩行技術が非常におぼつかなかったことです。特に、稜線上で風にあおられて、1度転倒してしまったことは致命的だったと思います。横や後ろから上級生に支えてもらいましたが、あと3ヶ月で上級生になる身として、新しい後輩の安全を守れるような状態とは程遠かったです。上級生の方から姿勢などのアドバイスを頂いたから、これから山行に活かしていきたいです。私は、赤旗を持つ日が多くたのですが、藪の通過に非常に苦戦してしまい、1本折ってしまいました。先端を常に見える位置に置くようにしたいです。

また、持ち物に関しては不備が多かったです。ヘッデンやコンパスをはじめ、サンガラスが曇って前がほとんど見えないなど多くの問題がありました。隊全体に迷惑をかけてしまったので、すぐに買いなおして改善します。他にも、1つ1つの行動が遅いです。冬の動きを早く完璧にしてもっと先を見た行動ができるようにしたいです。

読図に関しても確認する回数が少なかったり、地図を出し入れするスピードも遅かったりするのもっと早くします。どこで迷いやさしいかなども事前に印をつけておく必要性も痛感しました。登っている途中でも下山時のイメージを常に持っていたいです。それから返事の声が小さかったです。声が聞こえづらい冬山では連絡などに大きな声が必要です。もっと自分の考えに自信をもって声を出していきたいです。

エッセンでは、気遣いが足りていませんでした。鍋の向きなど細かいところ、先の動きも考えて気遣いができるようになりたいです。

あと3カ月で上級生になるのにできないことが多すぎるので、できていないところを1つずつ改善していきたいです。これからは隊全体の動きに対して主体的に参加していくこうと思います。

橋本

今回の冬合宿においての反省を生活、行動に分けて述べる。

まず生活の反省において、エッセン時の先を見据えた行動がなかなかできていなかったと感じる。水づくりをしている中で、どちらのコップフェルでエッセンをするか、いまコップフェルに入っている水は沸かす必要

があるのかなどいろいろと考えてしまい、次の動作にすぐに移ることができていなかった。エッセンの流れのテンプレのようなものを頭の中に入れてテント内での生活をスムーズに行えるようにしたい。また、自分の個装の管理が甘かったため上着をなくしてしまった。朝のパッキングの際に、隣の人が間違えて入れていたことをその日の行動後に知った。行動中に上着が必要になった場合に、上着を探すという時間ロスや寒い中行動しなければならない可能性もあったため個装の管理くらいしっかりできるようにしたい。万が一に備えて企画袋に自分のであるとわかりやすいようマイカラーを張るのもよいかもしれない。非常に恥ずかしいことながら天気図がいまだに下手であった。この時期になるとさすがにましになっているだろうと思っていたがむしろひどくなっていた。長いこと書いていなかったのが問題と思われるので定期的に下界で練習しようと思う。

次に行動の反省において、冬山の歩行技術がいかに身についていないかが良く理解できた。トレースを崩してしまう、歩きがおぼつかない、バランスを崩してこけてしまうことは多々あった。中でも稜線の上りにハイマツが出ている箇所があり、ワカンを滑らせてこけてしまったのは危なかった。こけた後にステップをきいていなかったことも反省である。体力的にきつい状態でも危険箇所での行動は慎重に行いたい。団装の赤旗を折ってしまったことも大きな反省である。自分のガッシャーにどれほどの長さのものが刺さっているのかを自覚して林道では注意して行動することを心がける。読図に関しても天気図くらいひどいもので

あった。地形をある程度頭の中に浮かべながら実際の地形と比較するように意識づける。



会2

木村

今年の合宿は現役の力で対処可能かと思われるルートを選び、竹田さん・塩谷さん両名にはサポートで入っていただくに限ることを主としていた。そして結果的には現役のみで回すことができたとは思う。しかし、潜在的なリスクや悪条件までを想定した、いかなる条件でも完遂可能な形ではなく、好条件が重なったために運よく完遂できた山行であり、個人的にも隊全体としても自信のなさが浮き彫りになった山行だった。まず個人的には長引く風邪の影響からか、終始呼吸が苦しく、特に森林限界を超えてからは全くラッセルの戦力にならず、隊を引っ張れるほどの馬力はなかった。また、特に判断面において、危険箇所把握、ルーファイ、雪崩リスクと天候の管理、時間の見積もりなどにおいて、安全に冬山に入れるレベルに達していなかった。今回の山行の収穫として、竹田さん、塩谷さんに積極的に疑問をぶつけることができ、着眼点としては悪くないと感じた。一方でさわり程度は知識

があっても、それを実践できるほどの自信と経験を持っていないので、もっともっと山に行き洗練していく必要がある。塩谷さんから指摘していただいたが、入山前でできる限りの勉強と準備をして、自分の中で予測を立て、それを実際に山に入って確かめるというプロセスが重要だと感じたので、今後毎山行で精度を高めて山への理解を高めたい。特に危険箇所や気象の管理に関しては、具体性のある想定とその対策までの考えが不十分だと感じた。自分は希望的観測を基にプランを練ってしまうことが多く、気象、地形的、人的なリスクを第一に最悪の場合に備える癖をつけたい。そしてその想定が自分自身を対処できる分だけでなく、一年生の分も対処できる分まで含めたマージンも必要であることを確認したい。

今回横通岳～東天井岳間で、一年生の武田と江田のアイゼンが二度も取れた。自分は一年生の装備チェックを主に担当したため、これには大きな責任がある。今回は天候も良く、危険箇所でもなかったため良かったが、場合によっては致命的であった可能性もある。来年度からは行動中に使用する装備のチェックをより慎重に行うようとする。

一年生に関しては読図の精度の低さが際立った。明らかに顕著な場所でも現在地を誤認し、かつピストンにも関わらず下山時の読図がひどかった。また、中田・橋本・栗田は危険な所で大きく転倒する場面があった。これから山行では読図の精度と、危険箇所でのより慎重な歩行を期待するとともに、そこのフォローに努めたい。

気象係

気象係として天気予報と天気図、寒気の入りなどの情報を取集し、電波が入る限りは

毎日情報を更新した。しかし、ただ調べたことを全体に共有するばかりで、そこから推測されるリスクとその対処までを含めた提案をしていなかった。そこまで含めて隊の判断を左右する責任があると思うので、気象係でなくとしても天気予報や天気図を基に考えられるようにしたい。また、一年生のラジオ天気図はそれを基に予報するまでの完成度はなかった。夏から進展が見られないと、今後の精度向上に期待したい。また、その理由として入山前の下調べが足りていないと感じた。気象係でなくても天気の情報は各々が集めることを期待したい。

田中

今山行の反省を行動と生活、係の3項に分けて記す。

まず行動について。ラッセル云々については、特段気づきの伴う反省はないため割愛する。ルート全体の見通しが甘かったようを感じた。限られた日程、気象条件の中でのように行程を進めていくのか。その想像力が私には不足していると強く感じた。これは経験不足によるものと考えられるが、経験できる回数が少ないのであれば、1度の経験からより多くのことを吸収できるよう努めるべきである。入山前の予測、入山中の判断、下山後の反省、基本的なことを積み上げていくことの必要性を今更ながら感じた。また今回のようなピストンの行程においては、下山の想定も重要であった。せっかく既知のルートを下山できるのであれば、その利点は最大限活かさなければならない。またこれほどの大人数での山行となると、マージンの重要性を強く感じた。今山行中でも怪我を負ったメンバーがいたが、残っ

ていた行程の軽さが功を奏して自力下山することができた。常に行程的、体力的にマージンを残しておき、柔軟な対応をとれるよう備えておくことが必要であった。

次に生活について。長期山行においては、テント内でどれだけ回復できるかが重要である。そのため生活を効率よく回すことが理想といえる。どれだけ疲れていたとしても効率よく生活を回せるように、そのようなテント内の空気感を作ることが上級生の務めである。自らの責務はサボらず全うしたい。

最後に係についてである。今山行で私はエッセン係を担当した。出発時にペミをどのズタ袋に詰めるか分からず手間取ってしまったため、ペミに付けた表記まで確認する必要があった。日本人たるものの大晦日にはそばを食すものと思っていたが、ここ2年間は食べていない。どうにかならないものだろうか。来年に期待。

日比

〈行動〉

まず全体のラッセルが遅すぎた、特に急斜面やズボリやすい密な樹林帯のラッセルが遅かった。一年生のラッセルが遅いのは当たり前でそれを前提として、三日目からではなく一日目から煽って急かして早く進ませたりラッセルを速く回すように言うべきであった。今後は人数を考えて積極的に煽ったりして早く進ませたりしようと思う。次に竹田さんと塩谷さんに指摘されたことだが、リーダー会で明日の会議をするときに、いいコンディションの場合どこまで行程を進めるかという希望的観測かつ無責任な考えで、調子のよくないメンバーがさら

に悪化した場合や気候コンディションが悪いことを想定したリスクの認識と管理が甘かった。今後はリーダー会でどのようなリスクがあり、どのような対処をするのかまで地形、天気、人、ルーファイ、雪などの要素をすべて考え、客観的かつ具体的に話し合って、想定していないリスクに直面しないようにしていく。

次に武田のアイゼンが2度も外れた、今回は稜線が広く転んでも一発で滑落するような場所ではなかったのとアイゼンを履きか直す充分なスペースがあったから何とかなったものの、もし危険箇所でアイゼンが外れれば死に直結するため絶対に起こしてはならないことだった。これは最初にアイゼンをつけたときに紐が締まっているということをただ確認するのではなく紐が締まってなくて外れることはないと言い切れるくらいのレベルで確認するべきであった。そうしていれば一度外れたときにフィッティングがおかしいことに気づけたはずである。またペツルのバサックの後ろコバにはめるパーツの調整の仕方を知らなかつたことも問題である。自分が使っていないメーカーのものも会1が使っているのであればその商品の使用方法について知識を持っておくべきであった。

〈生活〉

今回の合宿で会1のうち2人の生活を見ることができなかった。テント割を決めてもらう前に誰を見ていないのでその会1と同じになるようにテント分けしてくださいと頼むべきであった。

次に、これは口出しをされる会1が悪いという意見もあるが、生活の効率があまりに悪く指示を出しすぎてしまった。自分で考

えられるレベルの知識と考え方はすでに教えたつもりだったが、考え方をこうすればいいとかこう考えればいいと教えるのではなく工夫して、次はどうすればいいと思う？とかなぜそれがだめだと思う？といった風に考えるクセを付けられるような指導の仕方をしていこうと思う。

〈まとめ〉

今回の冬合宿は雰囲気を締めきれなかったなど反省点が尽きないが、全員大天井岳に登頂することができてよかったと思う。ただ、三日目に天気が悪かったり、ラッセルがもう少し深かったら大天荘までたどり着けていたかわからないし、悪天の中稜線で沈殿することになっていたかもしれない。今後は悪天の場合のリスク管理や行動戦略について経験を積み知識を増やして来年度の冬合宿も成功させたいと思う。塩谷さん、竹田さん今までご指導ありがとうございました。今後は今まで教えていただいたことを忘れず、自ら考え、基本現役だけで無事故で山行を重ねていきます。



朝木曾駒ヶ岳

日程：10/3（水）

メンバー：

会2　日比(L)、田中

記録：

1日目 晴

4:30 桂小場登山口

6:15 大樽避難小屋

6:30 発

7:25 桂小場登山口

所感：

朝山行ということで木曽駒ヶ岳に行くつもりで入山した（木曽駒ヶ岳までは長いので行けない前提）。大樽避難小屋では雑人雑感的なのがありそれを読んだ。

海谷山塊縦走

日程：10/5（土）

メンバー：

会2　森、木村（L）

会1　武田、中田、本田

記録：雨

06:25 駒ヶ岳登山口（根地コース）

08:10 駒ヶ岳

08:25 出発

10:35 鬼ヶ面山

10:50 出発

12:50 鋸岳

13:05 出発

15:25 鋸岳登山口

所感：

補助ロープが思いのほかしっかり張っていて、使いやすかった。泥と落ち葉が混じった道で滑りやすく、下りは慎重を要した。また、笹や枝もなく、戸隠よりも降りにくかった。下草はある程度あったが、藪漕ぎまではいかなかった。ルーフアイも特に難しい箇所はなく、ピンテも多かった。

駒ヶ岳通過後の 1498m からの下り（崖マーク超えるところ）が、かなり悪かった。下は切れているし、崖の中腹あたりをトラバースし、最後も足場がほぼ無い。最後は念の為おたすけロープ（普通のクライミング用）にブルージックを巻いた。結局ここは崖を回ってからトラバースみたいな感じだったが（行って戻るみたいな感じ）、木から支点を取り崖を懸垂下降の方が早かったし、安全だった。場所により、おたすけロープに横フックスで通過した。

鋸岳手前のハシゴは全く問題なかった。鋸岳からの下は今回は乾いていたので、問題なかったが、濡れていれば懸垂した方が良さそう。



笠双六（クリヤ谷）

日程：10/6（土）～10/7（日）

メンバー：

会2 田中(L)

会1 江田、橋本

記録：

1日目 曇り

5:15 中尾高原口バス停駐車場

5:25 クリヤ谷登山口

6:50 錫杖岳取付き

10:30 クリヤの頭

11:10 雷鳥岩

12:45 笠ヶ岳の肩

13:00 テント場（2780m付近）

2日目 晴れ

3:00 起床

4:00 発

4:20 笠ヶ岳

5:45 抜戸岳直下

7:35~50 小池新道分岐

8:40 双六小屋

9:20~40 双六岳

10:05 双六小屋

10:45~11:05 小池新道分岐

11:30 鏡平山荘

13:00 小池新道登山口

14:15 新穂高温泉

所感：

1日目、早速今回の山行のメインであるクリヤ谷に入る。クリヤ谷は数年前から整備が行われていない準廃道のような登山道である。笹が登山道を覆っており、ルーフ

アイが必要な部分も出てくるとのことだ。今回は雨後であったため渡渉の難易度が上がっていたものの、全員ドボンすることなく通過できた。遺憾である。藪漕ぎの本番は渡渉を超えた先、錫杖分岐も超えた先からである。終始笹藪であったが、葉には水滴がついており、レインウェアの着用は必ずであった。しかし聞いていたほどの藪地獄はなく、少し刈り払いが行われたようであった。拍子抜けとまではいかないものの、そこまで難しいルーフアイもなく突破。会1は全身濡れて文句を言っていたが、元気そうである。クリヤの頭からは少し薄いが明瞭な道が付いている。笠ヶ岳の手前でテントを張った。

2日目、終始快適な登山道、消化試合である。正確には笠ヶ岳手前はガス、ヘッテン行動ということもあり少し迷ったが、クリヤ谷に比べれば容易い。双六から見た笠はいつの間にか晴れていた。



戸隠～西岳縦走

日程：10/6（日）

メンバー：

会2 森、木村（L）
会1 武田、中田、本田

記録：曇時々雨

05:25 駐車場
05:35 随神門
06:05 奥社
07:30 蟻の塔渡り
09:15 八方睨
10:45 本院岳
11:05 出発
11:30 引き上げ
13:50 西岳
14:05 第一峰
19:40 1028m
20:10 西岳登山口
20:20 駐車場

所感：

今山行はバリエーションルートに行く準備として、ロープ出しの練習を兼ねて計画した。懸垂の準備に時間を要す、不要な箇所でのロープ出しにより時間をロスする、一年生が咄嗟にバックアップ懸垂ができるなど多くの課題が浮き彫りになったが、会1と会2でこの時期に行くには、バリエーションルートに行く前の下準備としていいと思った。

蟻の塔渡りは濡れていて危険と判断し、横フィックスで通過。中間支点はアンカーとケミカルで安心。風が抜けるため結局乾

いていてあまり必要なかった。仮にロープを出してトップが通過しても、中間支点を1~2本取ればいいと思い、それしかアルヌンを作らなかつたが、結局4本取れて、個装で代用も、ビナが足りなくて安環も使つた。中間部で広くなつていて安全地帯あり。60mロープだと本当の末端まで出せる。途中2パーティーに先に通過してもらったため通過に時間がかかった。

本院岳までは崖沿いを歩いたりはするものの、歩きやすく特に鎖箇所もない。ほぼ登山道。偽ピーク直下は完全に鎖に荷重をかけるような箇所あり。（下が切れているなどはない）

西岳直下は下が崖なのに、垂直。しかも脆い箇所があり、引き上げをした。木村がフリーで登ったが、途中30cmくらいの岩が外れてかなり危なかった。三つに別れて一つ目を落とす時、下と連携が取れず、武田に当たりそうで危なかった。最初はロープを出さない予定が、途中の安定した箇所でやはり危険と判断し、末端を自分につけて、ロープを落とすということをした。また、団ガチャを森が持っていて、上で足りなくなった。中途半端なロープ出しだったので、判断に迷ったとしても十分な準備をしてから登るべきだった。2人、4人パーティーを途中通すことになり、ものすごく時間がかかった。

第一峰から下は3箇所懸垂した。内2箇所で、ロープの回収ができなくなった。原因はなるべく太い木の根本から取ろうとして、懸垂箇所から少し奥の木から支点を取ったためにロープが大きく屈曲し、下から引いても上まで力が伝わらなかつたことによる。どちらもしっかりした木であったこ

とから、根本からではなく、なるべくロープが屈曲しないようにするべきだと思った。また1箇所は残置スリから取った。

最後の懸垂はヘッテンをつけながらになったが、崖直下などの危険箇所を明るいうちに通過できたのは良かった。



鹿島槍ヶ岳

日程：10/9（水）

メンバー：

会2 金子、木村（L）

記録：晴

12:55 駐車場
13:40 登山口
14:25 高千穂平
15:15 冷池山荘
15:45 布引山
16:10 鹿島槍ヶ岳南峰
16:25 出発
16:45 布引山
17:10 冷池山荘
17:45 高千穂平
18:15 登山口
19:00 駐車場

所感：

午後休で登り始め、冷池山荘で一泊し、翌日の1限までに松本に帰るという試みだったが、林道区間を除けばコースタイムの2.5~3.0倍。特に高千穂平までは3倍のハイペースで登ったため、日帰りで帰ることができた。危険箇所も稜線合流前のザレ場くらいで登りやすい。メンバーを選べば、授業前でもいける。



八ヶ岳全山ワンデイ

日程：10/11（金）

メンバー：

会2 日比(L)

記録：

1日目 晴
2:10 富士見高原ゴルフ場発
2:40 1700m 地点引き返し
3:15 駐車場着

所感：

2:40 に熊の親子に遭遇し、威嚇されたため怯えつつ下山。車で震えて眠りについた。

唐松岳

日程：10/17（木）

メンバー：

会2 木村（L）

記録：晴

03:45 駐車場

04:00 リフト乗り場

04:20 八方池山荘

04:40 八方山

05:50 唐松岳

06:40 出発

07:20 八方山

07:35 八方池山荘

07:50 リフト乗り場

08:30 駐車場

所感：

往復3時間あれば行ける。核心はリフトが動く前に下山すること。無課金で行こうとすると、立ち入り禁止エリアを通過することとなり、2回も怒られてしまった。ただ、私有地とはいえ、スキー場の整備道くらい通らせてくれとは思う。



常念岳 避難小屋泊

日程：10/17（木）～10/18（金）

メンバー：

会2 木村（L）

会1 中田、江田

記録：

1日目 晴

17:45 駐車場

18:00 登山口

20:35 前常念岳避難小屋

2日目 晴

04:00 起床

04:35 出発

05:10 常念岳

05:55 出発

06:15 避難小屋

07:50 登山口

08:00 駐車場

所感：

朝に唐松岳に登ってから、夜に再入山。松本の地の利を存分に生かしていると実感。避難小屋でおでんを食べたり、ゆっくりして、朝日の出を楽しむという山行。次はもう少し早く出発して、夕焼け、宴会、日の出と山をゆっくり遊び尽くしたい。トレーニングにも最適。



10:50 根石岳
11:15 天狗岳
12:15 中山峠
12:40 中山
13:10 発
14:00 高見石小屋
14:25 丸山
15:10 麦草峠着



八ヶ岳半山

日程：10/18（金）

メンバー：

会2　日比

記録：

1日目 晴のち雨

2:30 富士見高原ゴルフ場発

4:20 編笠山

4:45 青年小屋

5:30 権現岳

6:20 キレット小屋

7:30 赤岳

8:00 赤岳展望荘

8:05 地蔵の頭

8:45 横岳奥の院

9:15 硫黄岳山荘

9:30 硫黄岳

10:00 夏沢峠

10:25 箕冠山

所感：

権現岳から赤岳の間は梯子が古くて怖いイメージがあったが補強されており以前より安心して通行できるようになっていた。ほかは特に目立った危険個所も少なく歩きやすかった。序盤はいいペースで歩けていたが、後半から激しい睡魔に襲われペースが落ちてしまった。入山が早い時は入山前に長時間寝ておくべきであると猛省。

餓鬼岳、唐沢岳

日程：10/20（日）

メンバー：

会3 椎屋
会2 金子、森、木村（L）
会1 江田、橋本

記録：晴

05:50 白沢登山口
06:50 魚止ノ滝
08:15 大屈山
09:50 餓鬼岳
10:15 出発
10:40 椎屋さんと分隊
11:50～12:15 唐沢岳
13:40 椎屋さんと合流
14:15 餓鬼岳
15:20 大屈山
16:35 魚止ノ滝
17:30 白沢登山口

所感：

当初は表銀座縦走も兼ねて計画していたが、雨によりピストンになった。魚止めの滝までは沢沿いや、トラバースで斜面に取り付けられた板を進むなど、登山道はバリエーションに富むが、その後は比較的短調。餓鬼岳、唐沢岳から見る裏銀座と、槍ヶ岳は壮観。餓鬼岳～唐沢岳間は、アップダウンが激しく、見た目以上に時間がかかったが、道は明瞭でしっかりと整備されていた。途中で椎屋さんが不調により分隊した。



黒姫山

日程：10/25（金）

メンバー：

会3 黒木（L）
会2 日比

記録：

1日目 晴れ
8:00 黒姫表登山口
11:20 黒姫表登山口

所感：

黒木のリハビリがてら、キノコを探しつつ、黒姫を散策した。黒木はストックをつければ歩ける状態だったので、下部のほぼ傾斜のないところを歩いた。ハナイグチがあった。



南佐久バリエーション

日程：10/26（土）～10/27（日）

メンバー：

会2 日比(L)、田中
会1 橋本

記録：

1日目 晴

5:50 馬越峠入山

6:15 分岐

6:35 天狗山ダイレクト取り付き

6:45 登攀開始

11:30 登攀終了

11:40 天狗山山頂

12:25 丹後市山

12:55 分岐

13:20 登山道を外れる

13:50 男山ダイレクト取り付き

14:00 登攀開始

16:05 登攀終了

16:20 男山山頂

17:40 男山登山口着



所感：

天狗山ダイレクト、男山ダイレクト共に岩がもろく落石を起こしやすかった。天狗山ダイレクト 2P 目のルートは小ハングを超えて直上するか、5 メートルほど左のボロボロな凹角を上がるかの二択である。今回は凹角がかなり不安そうに見えたので前後のルートを取ったが、小ハング下の特大フレークというか 2m ほどのピナクル的なものは浮いており、それで支点をとってももし落ちたら岩ごとはがれてかなり危ないため、ハング前に支点を取れないという状況であった。バリエーションでは当たり前であるが、このルートは確実に落ちない能力がリード者に限らずフォローにも求められる。どこ山ダイレクトは 1P 目にランナウトするため注意して登る必要がある。

浅間山第一外輪山

日程：10/27（日）

メンバー：

会3 椎屋晴賀
会2 金子遊風(L)
会1 中田昌希

記録：

1日目 晴れ

5:45 入山（浅間山荘）

6:50 火山館

8:15 鋸岳

9:20 黒斑山

12:40 火山館

11:30 下山（浅間山荘）

所感：

車を持たない3人が集うとどうなるか…
我々をその答えに導いてくれた山行だった。

アプローチは自転車。自動車などという甘ったれた令和っ子のような真似はしない。中田は前日の午後に松本を発ち、上田城を見て回って浅間山荘前で野宿。金子は22時に同じく松本を出発して深夜の三才山トンネルを突っ走り、途中リサイクルストアなどに寄りながら3時過ぎに到着。椎屋さんにいたっては、長野でのバイト終了後、終電で松本まで来て、そこから午前1時過ぎにロードを回収して4時間ほどで登山口まで来るという驚異の強硬策に出た。

肝心の山行の内容だが、平和極まりない。ハイキングである。登山道は基本的に快適で、天気も申し分ない。眼下に上毛及び関東平野が一望できる。

浅間山はチョコレートプディング。端正なお椀型で息を呑む美しさだ。

難しいところはあまりないが、草滑りルートの下りはなかなか神経をすり減らす。火山由来の屑がたまたま急斜面に登山道についているものだから、落石とスリップつづら折りの連続。掴まるような樹木や背の高い下草などはない。このような感じで常に落石に被弾する環境下に数百メートル暴露される。登りの場合も、何もない南斜面なのでカンカン照りだとだいぶしんどそうである。

パーティの概況としては、そもそも椎屋さんは外輪山に登っていない。というのも信じがたいスピードで登山口まで到達したとはいえ、入山時刻までには間に合わなかつたからである。先に行ってくれとお決まりの死亡フラグを我々にメールしたが、そ

の後無事に落ち合った。

ほかには中田が睡眠不足でバテバテだった。どうやら浅間山荘の駐車場で野宿しようとしたところ、山荘の人にやめてくれと言われたらしい。しかも山荘にいたラブラドール・レトリーバーちゃんにほえられ完全に委縮。林道の脇でおびえながらツェルトにくるまっているところを、夜更けに金子に発見された。

総評としては、やはり山屋にとって車はあった方がいい。浅間山は本峰に行ってみたい。秋に行くのはお勧めします。



朝蝶ヶ岳

日程：10/28（月）

メンバー：

会2 木村（L）
会1 中田

記録：晴

02:55 三股駐車場
03:10 三股登山口
04:55 蝶ヶ岳
06:25 発

07:20 三股登山口

07:30 三股駐車場

所感：

行動時間は往復3時間あれば十分。危険箇所も特になく、授業前でも気軽に登れる。



大同心南稜～小同心クラック

日程：11/1（金）

メンバー：

会2 日比（L）

師田さん(OB)

記録：

1日目 曇り

5:55 駐車場

6:00 美濃戸口

7:05 赤岳鉱泉

7:15 大同心沢分岐

8:10 南稜取り付き

8:25 登攀開始

9:40 TO

10:00 南稜取り付き

10:15 小同心クラック取り付き

10:30 登攀開始

12:30 横岳山頂

13:20 地蔵分岐

13:50 行者小屋

15:15 美濃戸口

15:20 駐車場

所感：

OBの師田さんに八ヶ岳バリに連れて行っていただいた。

南稜は凸凹した岩壁をしていてアンカーなどが見えずらいため、ルート取りに気を付けないと間違える可能性があるが、ムーブ的にはかなり優しい上に、きれいなアンカーが終了点だけではなく中間点にも豊富に打ってあって安心感があった。

小同心クラックのルーファイは難しくないが、アンカーは終了点以外にほとんど打っておらず、基本はたまにある残置ハーケンかナチュプロで中間支点を取らなければならない。また、頂上に残置物は見つからなかったので、ナチュプロで終了点を作る必要があり非常にいい練習になった。

小同心クラック、大同心南稜ともにナツツよりもカムやピナクルが有効であった。

半分くらいリードさせていただいたが次回は全ピッチリードしたい。

最後になりますが師田さん連れて行っていただきありがとうございました。非常に勉強になりました次回もよろしくお願ひいたします。



白根南嶺

日程：11/3（日）～11/4（月）

メンバー：

会2 金子(L)、木村、小嶋、田中、日比、森

記録：

1日目 晴れ

7:10 笹山登山口

8:35 1603mP

11:25~55 笹山

13:15 白剥山

13:35 奈良田越

15:55 伝付峠

2日目 快晴

3:00 起床

4:05 発

5:45 天井小屋山

6:45 園松尾山

7:50 笹ヶ岳

8:15 小笊ヶ岳

10:05 三角点ピーク

12:15 砥の里キャンプ場

12:45 老平登山口

所感：

会2だけで南アの奥地、白根南嶺へ向かった。笹山ダイレクト尾根は地形図上では示されていない登山道であるが、明瞭で登山道と呼んで差し支えないものだった。笹山以南は南アらしい美林が続く。奈良田越～伝付峠は林道跡であり、自然に還ってゆく人類の遺構に終末感を覚える。雨天後ということもあり、伝付峠の水場にはキンキンに冷えた水が流れていた。

2日目も気持ちいい晴れに恵まれた。伝付峠からしばらく続いた林道跡が終わると、笊ヶ岳へ緩やかに高度を上げていく。南ア主稜線とは異なり、緩やかな登りがありがたい。最後に急登を上げると笊ヶ岳。雲を突く富士山が美しい。笊ヶ岳からのランカン尾根はなかなか手強い尾根であった。悪場、落ち葉に覆われた急斜面、ルーファイ…特に大金山分岐以降の人工林地帯は正しく迷宮であった。

久しぶりの同期山行だったが、やはり楽しい。理由を明言するという野暮なことはしないが、同期山行は楽しい。また行きたいものだ。



有明山 表参道コース

日程：11/8（金）

メンバー：

会2 木村（L）

会1 中田

記録：晴

06:40 駐車場

06:50 表参道登山口

08:20 白河の滝

09:35 表参道登山口

09:45 駐車場

所感：

積雪と凍結により、白河の滝で引き返した。途中半分滝になっているところを登る箇所があり、水量が少ない時期にも関わらず、腕と足が濡れた。アスレチック感満載で楽しかったので、また来たいと思った。

鳥帽子岩左稜線

日程：11/9（土）

メンバー：

会3 椎屋

会2 日比（L）

会1 橋本

記録：

1日目 晴れ

7:10 駐車場発

7:40 取り付き

8:35 登攀開始

16:40 17P 前で登攀終了

17:20 駐車場

所感：

9時間あればトップアウトできるだろうと考えて7:00頃に出発したが、取り付きについたら3人組のパーティーがちょうど取り登り始めており、一時間弱待つことになった。そのあとも2P目の終了点で待機したりと何度も待つことになってしまった。気温も低く風もありとても寒かった。16P目に懸垂し17P目の開始点についてころに日が暮れてきたので、エスケープルートから敗退した。チムニー登りたかったなあ。



妙義山

日程：11/9（土）～11/10（日）

メンバー：

会2 森、木村（L）

会1 中田、武田

記録：

1日目 晴 裏妙義縦走

07:55 国民宿舎裏妙義

09:25 丁須の頭

10:45 烏帽子岩
11:00 三方塲
12:00 国民宿舎裏妙義

2日目 晴 表妙義縦走

05:35 駐車場
05:45 妙義神社・白雲山登山口
06:30 奥の院
07:25 天狗岳
07:45 相馬岳
09:30 鷹戻し
09:50 二段ルンゼ 懸垂
10:25 東岳
10:45 中之岳
11:20 中之嶽神社

所感：

裏妙義は短時間で、そこまで慎重を要するような箇所もなかったので、バリエーション練習という感じではなかった。表妙義縦走は混雑を避けて、ヘッテンスタートにしたのが功を奏し、鷹戻しまで待ちがなかった。海谷山塊や戸隠～西岳とは違い、鎖場以外で慎重を要す箇所もなく、また鎖場も、ステップとホールドに富んでいて歩きやすかった。ただ、ロープを出したとしても中間支点はほぼ取れないため。ある程度クライミングができる者でなければ、連れて行くのは心許無い。ロープ出しの練習のつもりであったが、そこまで必要性を感じず、二段ルンゼで無理矢理懸垂を出したのみに終わった。妙義山はバリエーションルートに富み、初めのステップアップに最適である。



爺ヶ岳東尾根

日程：12/21（土）～12/22（日）

メンバー：

会3 椎屋
会2 田中(L)、金子、木村、小嶋、日比、森
会1 江田、栗田、武田、中田、橋本
OB 塩谷さん

記録：

1日目 曇り
6:50 鹿島山荘
8:25 1476mP
9:45 1766mP
10:45～12:05 1978mP 天場
12:40 2198mP
12:55 ロープ出し
15:00 引き返し（ナイフリッジ先）
15:25 1978mP 天場
2日目 雪
5:00 起床
6:15 発
8:05 2198mP 引き返し
9:25～10:05 天場
10:55 1766mP

11:45 1476mP

13:05 鹿島山荘

所感：

冬の初週山行。鹿島山荘から積雪が十分にあり、最初の急登は比較的登りやすかった。その後も膝上のラッセルに苦しみながら登り、1978mPを天場とした。2198mP先のナイフリッジでロープ出し、およびラッセルを行う先発隊はすぐに発ち、後発隊はテントを設営した後に発した。この際、森と橋本は足のつりが取まらないためテントキーパーの任を課した。後発隊が2198mPに到着すると同時にロープ出しを開始した。しかし、支点構築などに時間を要した結果、隊全員がナイフリッジを渡り切った時点でリミットの時刻が迫っており、撤退を決定した。今山行はクリスマス（に最も近い）山行ということもあり、テントによってはケーキが振舞われた。

2日目早朝にも山頂へのアタックを敢行した。昨日のトレースが消滅するほど積雪があり、雪崩を警戒しつつ進む。しかし荒天やリミット、ナイフリッジの様子を考慮して撤退の判断を下した。新雪に埋もれたトレースを辿りつつ下山。最後の急坂のみアイゼンに履き替えて下った。近年稀な積雪の多さが今シーズンの楽しさ、過酷さを予感させた。



天水山

日程：1/5（日）

メンバー：

会3 黒木(L)
会2 日比

記録：

1日目 曇り
9:55 亀石川大門橋南の 592m 付近
11:55 819m
13:05 912m
15:10 林道上 652m
15:40 亀石川大門橋南の 592m 付近

所感：

黒木のリハビリ登山として天水山と三方岳の周回ルートを計画した。積雪はある程度あり、全層雪崩の跡が何か所かあった。怪我後初めての雪上歩行で思うように歩けず、912m の尾根分岐地点で西北西に伸びる尾根を使って下山した。尾根が複雑で読図の良い練習になる山域だと感じた。



苗場山

日程：1/10（金）～1/11（土）

メンバー：

会3 黒木(L)

会2 金子、日比

会1 中田、橋本

記録：

1日目 雪

9:10 硫黄川峠橋

11:55 松ノ峰

13:20 横山

13:25 横山と東側 1300mP とのコル

2日目 雪のち曇り

4:30 起床

6:50 発

7:00 横山

8:25 松ノ峰

10:45 硫黄川峠橋

所感：

1日目は、かなり天気が悪い予報が出ていたが、そこまで悪くなかった。尾根の下

部から、尾根の方向によっては強風にさらされる部分があった。急登部分はクラックが入った上に積雪があるような状態で、1年生は歩きにくそうにしていた。時間的に良いテン場まで登れそうになかったので、短めの行程となった。

2日目は、苗場に登る予定で早めに起床したが、ほぼ全員が風邪症状や足の不調を訴えたため、明るくなるのを待ってから下山した。前日の積雪が40cm程度あり、雪が安定していなかったため、踏み込むと斜面下部で小規模に雪が崩れる場面が何度かあった。このような積雪時のルート取りについていつも以上に考えさせられた。



志賀高原縦走

日程：1/11（土）～1/12（日）

メンバー：

会3 椎屋

会2 田中、木村 (L)

会1 江田、武田、栗田

記録：

1日目 晴

08:50 出発

09:45 取り付き
10:35 1693m
15:05 岩菅山
15:55 テンバ 2200m 地点

2日目 晴

06:15 出発
07:55 2337m
08:10 裏岩菅山
09:46 2210mJP
11:20 中ノ岳
12:05 2210mJP
17:45 道路

所感：

長野市から飯山市に向かう際、右手に見えたこの山域に興味を持ち計画。ラッセルを期待し、あまり人が入らない山域を選んだが、中々良い山域だったと思う。余裕を持って2泊3日で行程を組んだが、2日で下山することができた。ただ、計画段階で下山直前渡渉を見落していた点は大いに反省すべきである。

最低でも膝上ラッセル、斜度が強くなるとバンザイで非常に楽しかった。スノーモンスターも他の山域にはない様子で趣があった。中ノ岳手前は雪壁になっていて少し緊張したが、雪の状態が良くトレースをつければ一年生も問題なく通過できた。

栗田がライターをブス板の上に置きっぱなしにしていて、ライターが爆発・炎上した。燃料の残りが少なく事なきを得たが、危うく全て燃やすところだった。冬の生活にも慣れてきて気の緩みを感じられたので、改めて基本の確認をしたい。次はBCで裏岩菅山を滑走したい。



佐渡山 BC

日程：1/24（金）

メンバー：

会3 黒木(L)、椎屋
会2 日比、小嶋、森
会1 江田、武田、中田、橋本

記録：

1日目 晴れのち霧
7:55 大橋林道口駐車場
9:00 渡渉
10:55 1673m
11:20 佐渡山 11:55
12:40 佐渡山と 1738m のコルより北面へ
14:00 佐渡山と 1738m のコルより南面へ
17:10 大橋林道口駐車場

所感：

今シーズンはBC希望者が多かったため、誰がどのくらい滑れるのか確認をする

ために大人数での入山となった。OB から頂いた装備で入山したため、劣化による装備不良や靴擦れが発生し、時間を食った。また、個々で滑走技術やシール登高の経験に差が生じたため、待ち時間の多い山行となってしまった。積雪状況としては、パウダーを狙っていたが、北面に多少残っている程度で、かなりアイスバーンに近い状態だった。また、山頂にてドロップ準備をしていたら、ガスが入ってきてしまい、視界もあまりよくなかった。初心者が滑るには好条件とは言えないが、BC とはどういうものかを知ることはできただろう。北面滑走はパウダーが残っていて最高だった。

アイスバーンだったため、ブレーキがついている板でも外れると下まで落ちてしまうことがあったので、リーシュをつけるべきだった。



鍋倉山 BC

日程：1/31（金）

メンバー：

会3 黒木(L)

会2 小嶋、田中、日比

会1 中田

記録：

1日目 曇りのち霧

7:35 除雪終了点

11:35 鍋倉山 12:00

15:00 除雪終了点

所感：

積雪は新雪が深いところで 50cm 弱ほどのパウダーで最高だった。ラッセルはまだ BC に慣れていないメンバーもいたため、時間がかかった。山頂直下から霧が出始め、山頂からの展望はなかった。ドロップ時も視界が良くなかったため、こまめにリグループを繰り返しながら滑走した。パウダー滑走は最高だったが、慣れないメンバーはターンの切り方に苦戦していた。非圧雪斜面の滑走は圧雪斜面の滑走と異なるため、ゲレンデにて練習してから BC に連れていく方が良いとも感じた。個人的にパウダーの当たりを引いたのは久しぶりだったので楽しかった。



空木岳池山尾根

日程：2/6（木）～2/7（金）

メンバー：

会3 椎屋晴賀
会2 金子遊風(L)、森琢真
会1 江田圭介、栗田耕一、橋本辰

記録：

1日目 曇り
5:45 古城公園
5:55 簫ノ笛山登山口
10:00 簫ノ笛山
12:10 池山尾根との分岐(T.S.)
2日目 曇り
4:00 起床
5:15 発
6:25 P1920
6:50 池山小屋近くの分岐
8:15 林道終点
8:35 P1215
9:10 駒ヶ根高原スキー場

所感：

歩き主体ではあるがワンポイントでロープが出るような山行をしたいというのが、本山行の趣旨だった。

簫ノ笛山登山口から数10メートルはつづら折りの登山道を上がるが、人は入っていないしピンクテープもない。暗いこともあって、尾根に乗らねばいけないところを林業用か何かの踏み跡をたどってトラバースし続け、気づくと南側の谷へ入り込んでいた。雪崩るような積雪はなく、斜面を上がれそうだったので、そこから100m 強尾

根を目指して斜上にトラバースした。

乗り上げた後は非常にラッセルしづらい雪と笹の急斜面に苦しんだ。積雪は膝上から腰くらいまで。やはり人が入っている様子はなかった。予定テント場地はまだ先だったが、疲労と強風と残り時間のために早めに行動を終わらせた。

ちょうど大寒波がぶつかっていたため、翌日も低温に強風。ロープ出しているうちに凍傷になりそうだし、そもそも昨日のペースだと山頂には間に合いそうにない（後にも先にもトレースはなかった）ので、そのまま下山することにした。池山尾根は一つ南の簫ノ笛山のある尾根と比べて、なぜか積雪が格段に少なく、快調に進んだ。1920からの下りは、明瞭な地形無し、ピンクテープもまばら、トレースもなしでルーファイに苦労した。コンパス直進を用いたが、コンパスに個人差があつたり谷に阻まれたりして、精度はいまいちだった。

なお、本山行では江田がバナナチップスを初めて持ってきた。これ以降、バナナチップスは彼の定番レーションとなるだけにとどまらず、会全体に一大ブームを巻き起こすこととなる。



峰の松目沢・小同心クラック

日程：2/6（木）～2/7（金）

メンバー：

会2 田中(L)、日比
OB 塩谷さん

記録：

1日目 曇り

6:55 八ヶ岳山荘

7:40 美濃戸山荘

8:55～9:20 峰の松目沢出合

6ピッチ

15:40 懸垂開始

16:55 峰の松目沢出合

2日目 雪

5:00 起床

6:50 発

7:10 赤岳鉱泉

9:30 大同心南稜とりつき

10:00 小同心クラックとりつき

2ピッチ

12:35 懸垂開始

14:00 小同心クラックとりつき発

14:20 大同心南稜とりつき

15:05 赤岳鉱泉

15:20～55 峰の松目沢出合

16:35 美濃戸山荘

17:15 八ヶ岳山荘

所感：

日本列島に低気圧が迫る中、我々は極寒の八ヶ岳へ向かった。1日目は峰の松目沢南東沢でアイスクライミングをした。下部

では傾斜の緩い滝が目立ったものの、上部へ行くにつれて傾斜が増していく。2300mを越えるとツララのような滝になり、脆くかなり登りにくい。下降はすべての滝に懸垂支点や適当な立木があるため、スムースに懸垂できる。滝のバリエーションに富み、練習には良い沢のようだった。

天気が1日目よりはマシということで、2日目は小同心クラックへ向かった。マシとはいえ-30°Cに近い低温に加えて、吹き飛ばされそうなほどの強風。防寒着をすべて着込んでも寒く、その場にいるだけで辛かった。大同心稜からはアイゼンで膝ほどのラッセルが続いた。大同心南稜とりつき～小同心クラックとりつきの区間は、薄く雪が付いた岩をトラバースすることになり、ロープで確保できないという点では非常に恐ろしいアプローチである。本題の小同心クラックは2ピッチともに塩谷さんリード。私たちはフォローで登らせていただいたが、ボルトは雪に埋まっており、岩溝にも雪が詰まっており、リードとフォローでは難易度に雲泥の差があると分かるルートだった。そのほかにも岩質によるダブルアクスの有無など多くの学びを得られたように思う。登攀終了後は恐ろしいアプローチを引き返し、下山した。冬壁の過酷さを身に刻まれる山行となった。



鹿島槍ヶ岳赤岩尾根

日程：1/17（金）

メンバー：

会3 黒木
会2 日比、金子、木村（L）
会1 武田、橋本

記録：晴

05:45 駐車場
07:30 西俣出合
08:40 発
10:00 駐車場

所感：

黒木さんの不調により早々に敗退となつた。

北葛岳北葛尾根

日程：2/10（月）～2/12（水）

メンバー：

会3 椎屋
会2 森（L）
会1 江田

記録：

1日目 曇り
7:25 葛温泉発
7:40 尾根取り付き
12:35 1384m
12:40 テン場（1370m のコル）
2日目 晴れ

5:00 起床

6:45 テン場発

14:45 1670m 付近から引き返し開始

15:20 テン場（1650m 付近）

3日目 晴れ

5:00 起床

6:45 テン場発

8:00 1384m

9:45 尾根取り付き

10:10 葛温泉

所感：

記録の少ない尾根に行こうということで計画。1日目はシャクナゲの藪に苦しめられ、予定の半分も進むことができなかつた。

2日目はペースが上がったものの、1698m ピーク手前のナイフリッジ上でこちら側に巨大な雪庇が張り出しており、除雪などで通行を試みたが、時間切れで少し戻った場所で泊まった。これから天気を考えると北葛岳まで到達することは難しいと考え、撤退となった。ロープが必要なのは 1650m 付近の岩場の 20m ほどの区間だけと思われる。プロテクションはスリング類のみで十分である。尾根が細くなっている場所では東側に雪庇が張り出しているので常に注意が必要である。



槍ヶ岳中崎尾根

日程：2/18（火）～2/21（金）

メンバー：

会3 椎屋
会2 森(L)、金子、木村、田中
会1 江田、栗田、橋本

記録・所感：

1日目 雪

7:00 ビジターセンター発

7:15 とりつき

9:50 1650mP

10:45 中崎山

11:05 1670mP

12:10 1816mP

13:20 1942mP

14:15 天場(登山道合流手前 2100m 地点)

厳冬期槍ヶ岳。なんとも心躍る響きである。今年度の冬の長期山行として、槍ヶ岳の穂先を目指した。前日の降雪もあって樹林帯のラッセルは過酷なものになると想定していたが、存外に雪が固まっていた。順調に標高を稼いでいき、夏道合流の手前を天場とした。

2日目 雪

5:00 起床

6:30 発

7:35 2355mP

8:35 奥丸山

9:50 2388mP

10:40 天場(2400mP 付近)

2355mP の前にナイフリッジのような危険箇所があるものの、積雪が安定していた

ため、ロープを出すことなく通過することができた。その先は危険箇所もなく、気持ちの良い尾根歩きが続く。森林限界を超える直前の支尾根を少し下った箇所を天場とした。到着時刻も早かったため、連泊を見越して雪壁を築いておいた。

3日目 曇り

5:00 起床

6:35 発

9:20 千丈沢乗越

11:20 槍ヶ岳山荘

13:35 発

14:50～15:10 槍ヶ岳

15:45 槍ヶ岳山荘

天場まで下山、もしくは槍ヶ岳山荘冬季小屋泊を想定していたため、テントなどの不用な装備はデポして出立した。千丈沢乗越までは、基本的に尾根のやや東側を登って行ったが、乗越の直前が悪かった。乗越からは夏道に従って登っていく。吹き溜まりが多く、想定以上に時間を要した。山荘に着いた頃はガスガスだったため山荘へ避難。ガスの切れ間を伺って、アタックをかけた。1箇所、登りでロープを出して山頂へ至った。感慨深い山頂になるはずだったが、寒さとガスに負けて早々に退散。下りではルートを変更したため、ロープは不要であった。



4日目 晴れのち雪

5:00 起床
7:00 発
7:20～55 槍ヶ岳
8:20 槍ヶ岳山荘
9:45～10:40 最終天場

11:25 槍平小屋
13:15 白出沢出合
13:55 穂高平小屋
14:30 ビジターセンター

朝から好天に恵まれたため、再アタックを決行した。今回はロープを出さずに山頂へ。山頂は見渡す限りの白峰に囲まれていた。積雪が安定していたため、下山には飛騨沢を用いた。天場を経由して、支尾根を下降。飛騨沢からの下山は楽だが、退屈。



旭岳東稜

日程：3/28（金）

メンバー：
会3 椎屋晴賀
OB 竹田昂

記録：

1日目 曇り
4:45 美し森駐車場出発
6:10～35 出会小屋
6:45 旭岳東稜取りつき
11:40 五段の宮基部
12:45 旭岳山頂
15:25 ツルネの頭
16:25 出会小屋
17:50 美し森駐車場到着

所感：

…1泊2日での山行が多い本ルートだが、今回はワンデイでの山行となった。東稜に取りついてから五段の宮までそれなりに長く、序盤は樹林帯であり歩きづらい上に今回は雪質の変化もあり、私はラッセルに非常に苦戦し、疲労した。途中で岩場や雪の急斜面もあり、メンバーによっては確保等さらに時間がかかりそうな雰囲気であった。核心である五段の宮では全ピッチを竹田さんにリードしてもらったが、それでもてこずってしまった。雪庇の張り出しもあり、リードも多少の手間がかかっていたため、自分がリードでは帰れていなかったのだろうなと思う。多様な地形、路面に対応できる歩き、ミックスクライミング、雪庇への対処、ルーファイなどいつも以上に多様な能力を求められる山行であった。このルートをス

ムーズにリードできるようなレベルまで自分を高めていきたい。ワンディとなると全行程を通してかなりのスピード感を求められるため、日程を決める際は慎重に判断した方がいいように思う。



核心部・五段の宮

白根三山

日程： 3/2（日）～3/4（火）

メンバー：

会3 椎屋晴賀

会2 金子遊風(L)、木村俊太郎、田中佑之介、日比光彦

記録：

1日目 曇りのち晴れ

3:35 入山（奈良田）

5:20 P1542

7:00 P1704

7:50 雨池山
8:15 P1934
9:10 P2346
10:40 大唐松山東峰
12:40 P2580
14:30 P2633
16:35 穂高乗り上げ
16:55 農鳥岳
17:45 西農鳥岳
18:35 農鳥小屋
2日目 風雨強し
9:48 起床
21:00 就寝
すなわち沈殿
3日目 曇りのち雪
4:00 起床
6:20 農鳥小屋避難小屋発
6:30 分岐
7:50 間ノ岳
8:25 P2948
8:35 中白根山
8:50 北岳山荘
9:20 トラバース道分岐
10:00 吊尾根分岐
10:15 北岳
10:30 吊尾根分岐
10:40 トラバース道分岐
11:00 八本歯ノコル
11:40 P2838
11:55 ボーコン沢ノ頭
12:15 砂払
13:20 城峰
13:45 池山小屋
14:00 P2063.8
15:05 下山（あるき沢橋）
18:05 奈良田（開運隧道出口）

所感：

入山は奈良田の集落を少し過ぎた後にあり、奈良田第一発電所そばの交差点を向かって左へ。そこから少し上ると道路わきに駐車スペースがある。ここで木村が謎にコケて、ピッケルの石突でヤッケを破いたところから出発。

雪は皆無。鹿だらけで下草がない代わりに、そこら中が糞まみれだ。もはや人のトレースか獣道かわからないような落ち葉の禿げたところを選んで辿っていたら、完全に道から外れる。

尾根に復帰してしばらく行くと、日比が足の不調を訴える。今後の行程はまだ長いので、大事をとて下山していった。

雪は1700m付近から。なぜかトレースがあり、それに乗ってツボ足で軽快にペースを保つ。核心は大唐松山手前の200m強の急登。もろい岩と根の段差が細い尾根上に連なっている。今回は積雪がたいしたことなかったので割とすんなり行けたが、大量に積雪があると、傾斜が急すぎて後ろに倒されるような怖さを感じるかもしれない。またこの尾根を下降する場合は、ロープ必須かと思われる。支点となるような樹木には困らない。

みんな（主に私）バテながらも強行し、稜線にやっと乗り上げる。風強し。ガスガス。農鳥岳直下は時期によっては雪崩が怖いだろう。今回は雪がまとまっていた。

稜線上は雪が飛んでいた。登山道のくぼみに沿って着雪していたので、大体は夏道に沿っていった。暗くなってきて焦るが、バテて一向にペースが上がらず。3歩登っては10秒天を仰ぐといった具合だ。

西農鳥岳を下ったところに雪壁に向かっ

て斜め下へトラバースする箇所がある。雪壁（というか雪渓）に沿って15mくらい下っていけば登山道に復帰するのだが、この時はルーファイにてこずり、結局GPS様の御加護にあやかった。

その後なんとか避難小屋に着いた。埋まっていたが入り口は掘られていたので、即刻中に入り、安堵で息を吹き返した。

二日目は雨と風のため沈殿。恋バナで盛り上がる。なにかの間違いだと思いたい。

三日目は朝から飛ばした。まず手始めに一人もち5個とあんこ350gをたいらげる。そんなことをしていたら滅多にバテない木村のペースが一向に上がらず、間ノ岳までクラストした雪面を楽しみながらゆっくり上がる。

北岳の登りは本格的な岩稜帯。登山道は梯子や柵など視認できるものはあったが、ところどころわからなくなっていた。雪庇も多少出ていた。確かなアイゼン歩行技術が求められる。

今山行の一番の難所、八本歯ノコルは平均台のような細いリッジに着雪していて、どこが確かな足場かわからないのが最も恐ろしかった。記録を見た感じでは、梯子さえ使うことができればこっちのものだと見積もっていたのだが、全くそんなことはなく、むしろそのあと約5mほどのクライミング要素強めな登りとリッジ歩きの方が参ってしまった。ロープは出さなかったが、メンバーによっては十分出す。支点は樹木が使えそうだ。八本歯ノコルを逆向きに通過する場合には、懸垂下降またはロワーダウンするのが安パイだろう。



その後踏み抜きに苦しみながら歩を進め。森林に入るといよいよズボリがひどくなり、びしょびしょのまま一向に進まない。しばらくもがくと急に踏み固められたトレースが現れ、駆け降りることができた。なお、この時いきなりの堅い雪面に滑る者が続出した。私にいたっては、それでガッシャの下敷きになってどうにも動けなくなり、木で止まるだろうという安直な目測の下、ガッシャを放り出すという極めて危険な行為に及んだ。深く反省するところである。

そのあとは小走りで下りた。長い林道と、渋滞で翌日昼までかかる帰路が待っているとは、この時はまだ誰も知らない。

奥秩父一年縦走

日程：3/1（土）～3/4（火）

メンバー：

会1 橋本(L)、江田、栗田、武田

記録・所感：

1日目 快晴

10:30 道の駅みとみ

11:00 徳ちゃん新道

15:20 2468 ピーク

16:30 破風山小屋

1日目は破風山避難小屋まで行くという行程としては短いものであったが、快晴で気温も高かったため、冬とは思えないほど暑かった。1700m付近まで雪は全くなく、標高が上がるにつれて雪のついた道が多くなっていった。雪は半分溶けており、グチヨグチヨしていて歩きにくい雪質であった。2468ピークから避難小屋までのトレースが古いことや笹の上に雪がついていることなどから歩きにくい道であった。



2日目 曇り

4:00 起き
5:20 発
6:20 西破風山
6:50 東破風山
8:00 雁坂嶺
8:20 雁坂峠
9:00 水晶山
10:00 吉礼山
11:25 雁峠
12:25 笠取山直下 1900
14:35 唐松尾山
15:50 牛王院平 TS

天気が悪化するという予報の翌日には、小屋でモチベーションを回復させたいという考えがあった。そこで今日はできるだけ翌日の行動時間を短縮できるよう進めるところまで進もうということにした。しかししながら避難小屋の居心地が良すぎて、つい朝ゆっくりしすぎてしまったことは反省である。



3日目 雨のち雪

5:00 起き
6:40 発
6:50 将監峠
7:20 竜ばみ山直下 1800
7:55 大常木山直下 1800
9:10 飛龍山直下 2000
10:30 ミツ岩

11:35 ミツ山直下 1900

13:20 雲取山避難小屋

今日の目標は雲取山避難小屋であり、昨日の頑張りから行動時間は短くなっている。朝から雨が降り、次第にあられ、雪に変わつていった。今日の降雪で20~30ほど積雪となった。

4日目 曇りのち雪

5:00 起き
6:45 発
7:05 小雲取山
7:25 奥多摩小屋
7:55 七つ石山直下 1650
9:15 高丸山
9:45 日蔭名栗山
10:05 鷹ノ巣山
11:30 城山
11:45 将門馬場
12:15 六ツ石山
12:50 三ノ木戸山
13:30 下山

雪が少し積もっていたがクッションのようになっており、歩きやすかった。枝についた雪が非常に鬱陶しかった。



常念岳東尾根

日程：3/10（月）

メンバー：

会2 田中、森、日比、金子、木村（L）

記録：晴

05:40 駐車場

06:25 東尾根取り付き

07:20 1328m

08:35 1955m

09:25 2178m

11:15 前常念岳

11:55~12:25 常念岳

12:50 前常念岳

13:45 2178m

14:00 1955m

14:25 1328m

15:05 東尾根取り付き

15:40 駐車場

所感：

滅多にないドピーカン、完璧なトレースで、非常に気持ちの良い会2山行となつた。2度目の常念東尾根でかつ、トレースまみれでルーファイもラッセルもなく行程の面白みは全く無かったが、冬合宿の横通岳東尾根を俯瞰して眺め、過去の記憶と照らし合わせるのは楽しかった。1955mからは尻セードで快適に下りられた。（トレース崩してすみません。）生活具を背負つていったが、1dayで終わらせることができた。前常念岳経由の夏道の尾根を末端から取り付くのも楽しいのではないかと思った。



唐松岳八方尾根

日程：3/13（木）

メンバー：

会2 森、金子、木村（L）

記録：晴

09:20 八方池山荘

11:15 発

11:35 八方山

11:50 八方池

12:55 2361

13:15 2554

13:25 唐松山荘

13:35 唐松岳

13:55 唐松山荘

14:00 2554

14:10 2361

14:35 八方池

14:40 八方山

14:50 八方池山荘

所感：

八方池山荘までのリフトから降りて早々、強風により運行が中止に。上がってきた登山者が引き返し、パトロール隊員からも引き返すことを3度に渡り強く推奨された。ただ、3600円課金済みで早々に引き返す訳にはいかず。始め上がるうとしたが、ワンデー装備にも関わらず強風で体が煽られる。そのためすぐに引き返し、建物の影にブロックを積み上げ、掘り炬燵を作り、会2間で流行りつつ競輪を楽しんだ。木村は大儲けした。

二時間ほど経過すると多少風が弱まったので行動開始。八方池後的一部分はかなりの強風で進むのがやっとだったが、標高を上げればそこまで気になるほどではなかった。

重課金とはいえ3時間でここまでを味わえるのはいいと思った。



南沢大滝

日程：3/16（日）

メンバー：

会2 木村（L）
OB 竹田さん

記録：雪のち雨

06:10 八ヶ岳山荘
07:05 美濃戸山荘
07:55 取り付き
08:10 南沢大滝
14:10 発
14:45 美濃戸山荘
15:20 八ヶ岳山荘

所感：

赤岳主稜、阿弥陀北稜の継続登攀の予定が、悪天候により南沢大滝に変更となった。始め強風と降雪で寒かったが次第に天候は回復。ただ、下山時には再び降雨となった。トップロープで4本、最後はスクリューを決めながら登った。初めてのアバラコフにもチャレンジ、意外と上手くいった。

取り付く前はスラブ化が進んでおらず、降雪による雪崩リスクは低いと判断したが、高温によりスラブ化し、下山時には南沢からの分岐近くで軽いデブリを確認した。

前穂高岳北尾根 4 峰事故報告書

文責：黒木あおい

I. はじめに

今年度、事故が多発している中で、リーダーである私が自分の判断ミスにより事故を起こしてしまったこと、深く反省いたします。今後、私も仲間も同じような事故を二度と起こさないよう、ここに事故報告書を作成します。

II. 山行概要

期間：2024 年 8 月 7 日(水)～8 月 8 日(木)

メンバー：会 3 : 黒木あおい(CL)

会 2 : 田中佑之介、日比光彦、吉田沙瑛

入山地域：北アルプス

ルート名：穂高継続バリエーション

III. 事故の概要

事故日：2024 年 8 月 8 日(木)

事故者：黒木あおい（リード者）

発生場所：前穂高岳北尾根 4 峰直下（図 1 の地形図中の赤バツ）

事故者が 4 峰直下の登攀ルート外をリード中、残置したカムを回収するためロアーダウン中に、カムが外れ、約 12m 滑落した。



図1：事故発生場所



図2：5峰から見た4峰（赤丸が事故発生場所）



図3：事故発生場所拡大図

(黄色の線が一般的なルート。赤線が今回登攀を想定していたルート。)

行動記録：

1日目(8/7) 晴れ 上高地～徳沢～奥又白池

2日目(8/8) 晴れ後曇り 奥又白池～5,6のコル～4峰直下（引き返し点）～5,6のコル～涸沢～小梨平T.S.

※事故当日以外の詳細な記録は、ここには記さないため、穂高縦走バリエーションの行動記録を参照していただきたい。

8月8日(木) 2日目【事故当日】の行動記録

4:00 起床

4:45 奥又白池(発)

8:50 5,6のコル

9:45 5峰

10:40 4峰直下、ロープ出し

11:02 事故発生

11:25 痛み止め(カロナール)服用

12:12 1人目の常駐隊員が到着
12:10 ヘリ一時到着
12:20 2人目の常駐隊員が到着、黒木吊り上げ点へ移動開始
12:22 黒木移動完了
12:27 ヘリ到着、黒木引き上げ
12:54 黒木、相澤病院着
黒木除く他3人の行動
12:59 下山開始（ここから5,6のコルまでは常駐隊の方々に同行していただく）
13:45 5峰
14:30~15:10 5,6のコル（各方面へ連絡を行う）
16:10~50 潟沢ヒュッテ（常駐渓沢基地）
17:45 本谷橋
18:25~18:55 横尾（常駐横尾基地）
19:50 徳沢
20:45 明神館
22:05 河童橋
22:10 小梨平 T.S.

※天候不順のため、元の計画書の日程(8/4~8)を変更し、入山日を遅らせた。それに応じてルートを限定し、前穂高岳北尾根のみの登攀を目的として入山した。メンバー内で共有していた変更後の今山行のルートは以下に示す。

〈変更後のルート〉

1日目：上高地～徳沢～奥又白池
2日目：奥又白池～5,6のコル～（前穂高岳北尾根）～前穂高岳～（重太郎新道）
～岳沢小屋～小梨平 T.S.

※当該山行の翌日からサマテンが開催される予定であったため、小梨平 T.S.を下山口として設定している。

IV. ルートの様子

今回事故が起きた岩場は本来登攀するルートではない。そのため、この項では下から見た時のルートの様子、黒木が登攀中に感じたルートの特徴を合わせて記す。

まず、当該ルートは開始点付近に残置ハーケンがあったものの、本来登攀するルートではない。そのため浮石の多さが目立っていた。4峰の登り自体も浮石が多いうえに、ルートから外れるとさらに浮石は多くなっており、見た目以上に難しい登攀になった。また、支点確保は困難であった。

気象条件などによるコンディションの悪化は無かったものの、上記のように当該ルートは浮石の多さやオブザベーション時との差異の大きさなど、難しさがあるルートであった。

V. 事故発生前後の動き

※7ページの状況概念図を参照。

10:40 4峰直下、ロープ出し

4峰の奥又側（下から見て左側）の巻道が始まる地点にて、巻道を用いずにフィックスを張って直登するために、ロープを出す。その際、黒木はメンバー全員に対してルートを外れて登攀を行うかについて問い合わせた。結果、日比と田中は登攀を行いたいと答え、吉田は引き上げであれば登ると答えた。これにより、黒木リード、日比ビレイで登攀を行うことになった。

10:45~10:55 開始点から左上方ヘルートを取って登攀を行う

最終的に左側の巻道に合流することを目的としていたため、最初は左上方ヘルートを取り登攀を行った。しかし、下から見るよりも左上部のルートは難しく、黒木は途中でとった#1のカムを残したままクライムダウンを行って開始点の少し上まで戻った。

10:55~11:00 開始点からルートを変更して登攀を行う

一時的にカム（以降これをカム①とする）で中間支点を取った後、#1からロープだけを抜き、カムにつけたアルパインヌンチャクを持ってクライムダウンした。ルート取りを変更する旨をビレイヤーである日比に伝え、再度登攀を行うことにした。その際に日比から登攀を中止するか聞かれたが、恐怖心はあったものの黒木は登攀を続行すると答えた。その後は、上部に#0.75で1ピン目を取った後、カム①を回収し、さらに上部に#3で2ピン目を取った。

11:00~11:02(事故発生)

さらに上部への登攀を行い、3ピン目の位置に#2と#0.4をほぼ同じ位置に設置した。黒木はこの2つの支点を用いてロアーダウンを行い、残置していた#1の回収に向かおうとした。この間ビレイヤー及び下で待機しているメンバーと黒木の間で会話は無く、黒木の「テンション。下ろしてください。」のコールで初めて下のメンバーはロアーダウンを行うことを知った。その後ロアーダウン中に3ピン目からカムのずれる異音がしたことを黒木と日比が確認。日比が異音を受けてロアーダウンを続行するか黒木に尋ねたが、黒木はカムが決まっていることを目視で確認できていたため、速度を落としてロアーダウンを続行することに

した。

事故発生時

ロアーダウンを行っている黒木が岩角を越えてロープにかかる荷重が増え、荷重方向が変わった瞬間、3ピン目の位置に設置していたカム2つがほぼ同時に「バチバチ」と外れて黒木は落下。落下中に2回大きく岩に体を打ち付け、1度目は足首、2度目は背中であった。結果として2ピン目にテンションがかかり、約12m落下し止まった。黒木は2ピン目から左側に逸れた位置から落下したため、テンションがかかってからも右側へ振られた。最終的に下にいた田中の位置まで振られ、田中と接触したのと同時に止まった。

この先は黒木(要救助者)、吉田(連絡係)、日比と田中(その他)に分けて行動と様子を記す。

まずは黒木(要救助者)について記す

11:02~11:05 落下直後のパニック

落下直後、黒木はパニックに陥っていたが、意識はあった。また落下から約3分後には自力下山ができないなどの判断はできるようになり、救助者に対してその旨を伝えられるほどになった。

11:05~ 落ち着きを取り戻し、指示出しも行う

落ち着きを取り戻し、それ以降は救助者に対して指示を出せるほどになっていた。痛みから判断して自身の負傷箇所の伝達、救助要請の順序についての指示出し、救助者の確保の有無の確認など、救助者の心配もできるほどであった。

次に吉田(連絡係)について記す

11:02~11:05 黒木のガッシャ取り外し

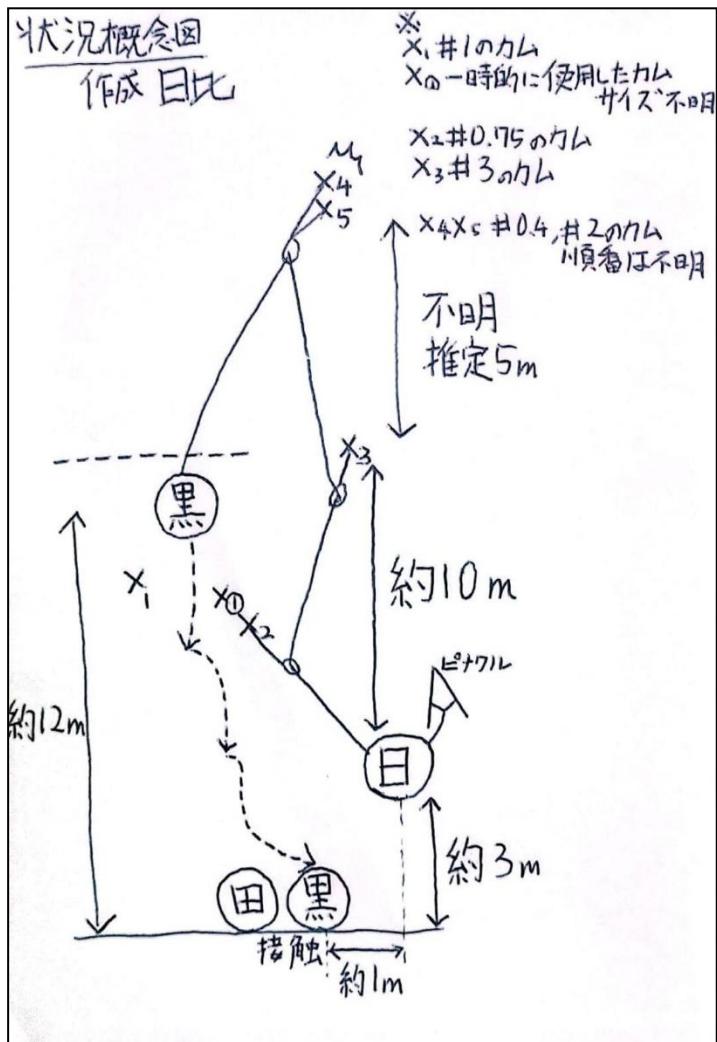
まずは落下してきた黒木のガッシャの取り外しを行った。その後、率先して記録と連絡を行うことを伝え、落下地点の少し奥又側（全員の目の届く範囲内、黒木から約5m）にて連絡を開始した。

11:05~ 連絡を行う

まずは留守に連絡を行った。留守はすぐにこれに応対し、概況を簡潔に伝えることができた。次に県警へ連絡を回そうとしたところ、黒木の提案によりOBであり涸沢常駐中であった塩谷さんに先に連絡を回すこととした。幸いにも塩谷さんもすぐに応対してくださったため、その後の救助要請などの手順についても助言をくださいました。

※涸沢常駐隊の方が、迅速な対応をしてくださったのは、本隊が5,6のコル通過時にしたあ

らよコールが聞こえ、緊急時ではないかと思い、本隊を観察してくださっており、事故の瞬間も観察してくださったため、事故直後に出動していただけたためである。



(点線は傾斜の変わるポイント。点線矢印は滑落時の黒木の軌道。吉田は枠外にいたため記載しない。)

VI. 事故の原因・反省点

1. 登攀ルート外の登攀を行うことに対する判断ミス

登攀ルート外であるということは、私を含め山行メンバー全員が理解していた。そして、上方に向かって左側に巻き道がついていることも分かっていた。しかし、下から見た岩の雰囲気だけで、登れるだろう。登ったら楽しいだろうと判断してしまった。これはまだアルパインの経験が少ない中でして良い判断ではなかった。アルパイン初心者の私たちは、このような冒険的な判断はせず、まずは登攀ルートとして事前情報を得ることのできるルートから経験を積んでいくべきであった。

また、吉田が登攀に対する不安を抱えていたにもかかわらず、登攀を行ったことも問題であった。隊として行動していくうえで、メンバーの意思を確認し、技量を計ることは山行リーダーの義務である。

2. 時間管理の不足

奥又白から5,6のコルまでに想定していた時間を大幅に超えていたにもかかわらず、北尾根の登攀を行った時点で間違いであった。私にとっては2度目の北尾根であるが、1度目は会1の時であり、あまり記憶がなく、ほぼ初見であった。もっと時間に余裕を持った状態で臨むべきであった。

3. 登攀ラインを見極める技術

今回は前穂高岳北尾根の登攀ルート外を登っていたが、その中のリード者である私のライン取りに問題があった。はじめは下から見てカムのとりやすそうなポイントを探してラインを考えた。しかしながら、このライン取りはスラブで見た目よりも登りづらく、ラインを変えることにした。このミスにより途中にカムを一つ残置いて登攀を継続することになった。下から見た際のライン取りの判断については、もっと経験を積み、登攀の際に感じる感覚により近いものを初見でも感じ取れるようにしたい。

4. 登攀を見通す力の不足

登攀ルート外であったにもかかわらず、登攀をするほどの技量が自分にはなかった。事故当時の記憶があまりなく、なぜこんな判断をしてしまったのかは覚えていない。だが、登り続けていたらカムは足りていたのか、フィックス前提での登攀でフォローが安全に登攀できる岩だったのか、終了点を作れる場所はあったのか、そもそもこの場所を登攀するほどに時間の余裕があったのか、などなど、事故の反省をしていると分からないことが多い。これはつまり、自分が何も考えずに登っていた証拠なのではないかと感じる。情報がないルートを登って対応できるほどの技術はまだ持っていない。この自覚をもって、私に限らず今の現役は情報のあるルートからもっと練習を積んでいく必要がある。

5. カム設置における技術不足及び知識不足

この事故の直接原因は、カムの設置ミスによるカムが抜けたことにある。私自身のアルパイン経験やナチュラルプロテクションの設置技術は、まだまだ未熟であった。しかしながら、時間短縮などの観点から、強固な終了点を構築する前にあまり登っていない地点で、仮のロアーダウン用の支点を作り、ロアーダウンを行った。私の中では決して妥協したわけではないが、もっと慎重に支点構築について突き詰めるべきであった。

今回ロアーダウンをしなければいけない状況に陥ったのは、2. で記した通りである。ロアーダウンで支点が崩壊しては、リード者はもちろんビレイヤーもなすすべがないことは明瞭である。だからこそ、これからはすべてのことにもっと慎重に取り組む。

6. カムからの異音に対する適正な対処の不足

ロアーダウンの途中で、ロアーダウンの支点から異音がしたことは記録のとおりである。私はこの異音を軽視してしまった。今考えれば、これは私に対する最後の忠告であったのだろう。しかしながら記録にも書いた通り、私は目視にて確認ができたため、そのままロアーダウンを継続してしまった。異音がしたということは、カムがはずれたもしくは、岩に何らかの異変があったということであるから、今後はしっかりと確認を行うことを徹底する。

7. リードとビレイヤーの情報共有不足

残置したカムをどう処理するかの部分で、ビレイヤーとの情報共有ができていなかった。私がリード中、「残置したカムについてどうするかは考える」とだけ共有し、その後のビレイヤーへの指示が「テンション」であった。これは完全に私の独断で、その判断についてビレイヤーに伝えていなかった。残置したカムはフィックス時に回収するには場所が離れていたため、私が回収するという判断を取った。

登攀はリード者のみで成立するものではないので、今後、情報共有は徹底する。

8. 装備の不備

私自身、下から見た岩の印象でルートのレベルを軽視していた。そのため、登山靴でチョークは出さず、ガッシャを背負ったまま登攀をした。フィックスを張る予定だったので、ガッシャはフォローに上げてもらっても良かったし、クライミングシューズを履いていれば、カムを残置することもなかったのではないかと考える。このように初見のルートであれば、クライミングによっぽどの自信がない限り、装備を整え、どんな状況にも対応できるようにするべきである。

9. 山行リーダー以外のメンバーの技量

今回の事故後の下山は、救助隊の方々に 5,6 のコルまでの危険区間を同行して下山していただいたが、残りのパーティーメンバーのみで安全に下山できたのかは難しいところである。今回は危険区間で、田中、吉田にショートロープをつけていただいたが、このような対応を 3 人でできたのかはわからない。今回の問題は、山行リーダーが事故にあった場合に、残りのメンバーで山行続行、もしくはエスケープを使った下山を行えるのかを、総会時の計画承認の段階で確認できていなかったのでは

ないかということである。今後は、一人一人の技量を見極め、慎重な計画承認を行っていくことを徹底する。

VII. 事故者の容態

事故者の病名：左足関節脱臼骨折、左足関節内果骨折及び後果骨折、前脛腓靭帯損傷、右足首の捻挫、右腕の擦傷、右脚の打撲

8月8日(木) 事故当日及び一回目の手術日

事故現場では左脚の骨折、右腕の擦傷、右脛の打撲など、下半身及び右腕に負傷が確認された。落下中に背中を岩に打ち付けたが、ヘルメットとガッシャによって保護されており、ダメージは無かった。事故直後はカロナールの服用とアドレナリンにより痛みが緩和されていたが、ヘリで相澤病院へ搬送された後は効果が切れて左足首の痛みに泣き叫ぶほどであった。

相澤病院にて検査を行ったところ、左足首の脱臼、左足腓骨の骨折、左足首付近の2か所の骨折が認められた。足首の腫れがひどく、靭帯の状況については手術の際に開いてみないと分からぬとのことであった。当日中に腰椎麻酔で手術を行い、腓骨の固定と脱臼部位の整復を行った。この手術の際に、靭帯の損傷も認められた。他の骨折部位の固定及び靭帯の再建をこの日に同時に行うことは、足首の腫れにより危険であると判断されたため、腫れが引いて手術を行えるようになるまで入院することとなった。



←相澤病院搬送直後のレントゲン写真

8月21日(水) 二回目の手術日

足首の腫れが引き手術を行えるとの判断で、一回目と同じ腰椎麻酔で、左足関節内果骨折及び後果骨折の固定、靭帯の再建を行った。手術後の痛みは体感では一回目の手術よりもひどく、眠れないほどであった。

8月23日(金) 退院日

二回目の手術の翌日より松葉杖の練習を開始。足に痛みは残るもの、入院の必要はないとの判断で、事故から15日後に退院した。

10月25日(金) 黒姫山

事故後初めての入山。入山といっても、2時間程度の平地歩き。ストックを片手に、止まりながらゆっくりであれば不整地を歩けた。

1月5日(日) 天水山

事故後2回目の入山、初めての雪山入山。5時間半程度の雪上歩行を行った。痛みはあるものの、痛み止めを飲めば歩ける程度であった。

1月10~11日（金～土） 苗場山

事故後、3回目の入山。1日目も2日目も行動時間は4時間ほどであり、痛みはあったものの、連日の宿泊装備を持っての行動もできるようになった。

VIII. 山行メンバーの言葉

黒木あおい（クライマー）

まず初めに、この度はたくさんの方にご心配とご迷惑をおかけしましたこと、お詫び申し上げます。特に、救助に携わっていただいた涸沢常駐隊の皆様、救助ヘリ関係者の皆様、長野県警察の皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。救助等の連絡を回してくださいました塩谷さん、ヘリを飛ばしてくださった岸本様、残置カムの回収をしてくださった竹田さん、その後のSACの活動を心配して連絡をくださったOBの皆様には感謝申し上げます。ともに山行に臨んでくれた日比、田中、吉田、そしてそのご家族の皆様、多大なるご心配をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げます。そして、私を信じてついてくれた後輩たち、裏切るような形になってしまい本当に申し訳ありません。

以下、事故時に私が考えていたこと及び反省と今後について書かせていただきます。

今回の事故は、私が無意識のうちに無理をしていたために起こったと感じている。会2から上級生がいないという異例の中、今は同期が椎屋のみ。下級生はとてもやる気があって、モチベーションが高くて、これに答えようと私は無意識のうちに無理をしていた。今年の2

月にはずっと抱えていた腰痛が悪化。それでも私が椎屋が行かなければアルパインに行けない下級生。とても負けず嫌いな私は、一緒に頑張っていかなければいけない会2にうまく頼ることができなかった。そしていつしか無理をしていました。

今までの自分だったら、ルート外の岩に登るなんて言い出すはずがない。クライミングに今でも苦手意識があるのに、なぜ見栄を張ってしまったのか。考えても答えは見えない。なぜあそこを登ってしまったのか、なぜゼロアーダウンをするという判断をしてしまったのか。もしこうしていたらというのは今いくら考えても無駄。事故後は岩が怖くなつて、山が怖くなつて、これを書き上げることもできなかった。でもこの事故を次につなげていかなければいけない。私は、みんなのおかげで生きている。事故当時の記憶はあまりなく、心も腐らなかつた。心も体も生きているからまだ行きたい山に行けるし、行きたい岩にも登れる。だから、まだまだ未熟なリーダーではありますが、みんなと強くなりたい。みんなともっといろんな山に行きたい。あそこで涸沢まで落ちずに止めてくれた日比、救助の連絡をしてくれた吉田、私の患部を確認して安心できるように支え続けてくれた田中。支えてくれた皆様に生かされていることを忘れず、二度とこのような思いをする者が出ないように。

山は自然のものであり、人間が簡単に太刀打ちできるものではない。だけどそれが面白いところだと思う。でも怪我をしたり、事故を起こしたりしてはいけない。こんな大きな事故を起こしてしまい、足は折れたが、まだ山に登りたいという心は私に残してくれた。こんな私だからこそなれるヤマヤがあると信じて、これからも山と向き合っていきたい。そして、リーダーとして、学年に関わらず信頼し、ロープだけの関係でない、命を守り合える仲間を作りたい。

最後に、私を支えてくれる人、応援してくれる人、一緒に山を行ってくれる人、すべての皆さんに感謝の意を込めてこの文章を締めたい。

日比光彦（ビレイヤー）

今回の事故は黒木さんだけでなく私や田中も命を落としていてもおかしくない事故でした。このような事故が二度と繰り返されないようにビレイヤーとしての反省点と今回の事故を受けて考えたことをここに記します。

反省点としてまず、今回の登攀ルートは総会で承認を通したときに想定されていたものではないのにも関わらず、楽しそうだからという理由だけで隊の実力を客観的に考えることもなく軽率に登攀を始めてしまったこと。次に、カムから異音がしたときに黒木さんに「このまま降ろして大丈夫ですか。」と確認し、「大丈夫。」と返答があったことで、『黒木さんがそう言っているなら大丈夫だろう。』と思考を放棄してしまったことである。

ビレイヤーはクライマーの命を預かっている以上、クライマーに全ての判断を押し付けて、ただ大丈夫かどうかを聞くだけでは無責任である。ビレイヤーとしてクライマーの命を守るために、広い視野で全体を見渡し、より安全で確実なルート、方法がないかどうか思考を放棄せずに考え続け、主体的に登攀に関わらなければならない。また、危険であると思ったの

ならば、上級生だからとか気にせずに共に登る仲間として遠慮せず発言しなければならなかつた。

私には黒木さんの命を預けていただいているという意識が足りていなかつた。途中で思考を放棄した私は、共に登る仲間失格である。そんな私が今後、誰かの命を預かってもよいのか、私はその命を守ることができるのか、まだ自信はない。しかし、今回の事故を深く心に刻み、今後の山行で知識や経験を積み重ね、山に生かされた自分の命を、預かった命を山で失わないように努めていく。

このような事故を二度と起こさないために対策として、一つ目に計画を承認する段階で登攀ルートや行動計画の細かいところまで詰めて考えること。最近はルートや装備について誤字がないかなどは見たが、装備が十分なのか、想定コースタイムはメンバーの力量を考えて適切なのか、具体的にどこでどのくらいロープを出すのか、どこで出すか不明な場合それでも安全にロープを出す技量はあるのかなど資料を各自で調べたりせずに計画承認していた。二つ目にリーダー依存型の山行は計画しないこと。今回もしヘリや常駐隊の方々に救助されなければ黒木さんを小梨まで運ぶことはおろか自分たちが無傷で下山することができなかつたと思う。

最後に SAC の仲間、塩谷さん、竹田さん、土田さんをはじめ OB の皆様方、涸沢常駐隊員の皆様、長野県警の皆様、救助ヘリの皆様、田中と吉田のご家族様、黒木さんのご家族様、今回の事故で多大なる心配、ご迷惑おかけして申し訳ございませんでした。

黒木さんが生きていて本当に良かった。